

古墳出現前後における集落の動向 —越後の集落を考える上での基礎整理として—

滝 沢 規 朗

1 はじめに

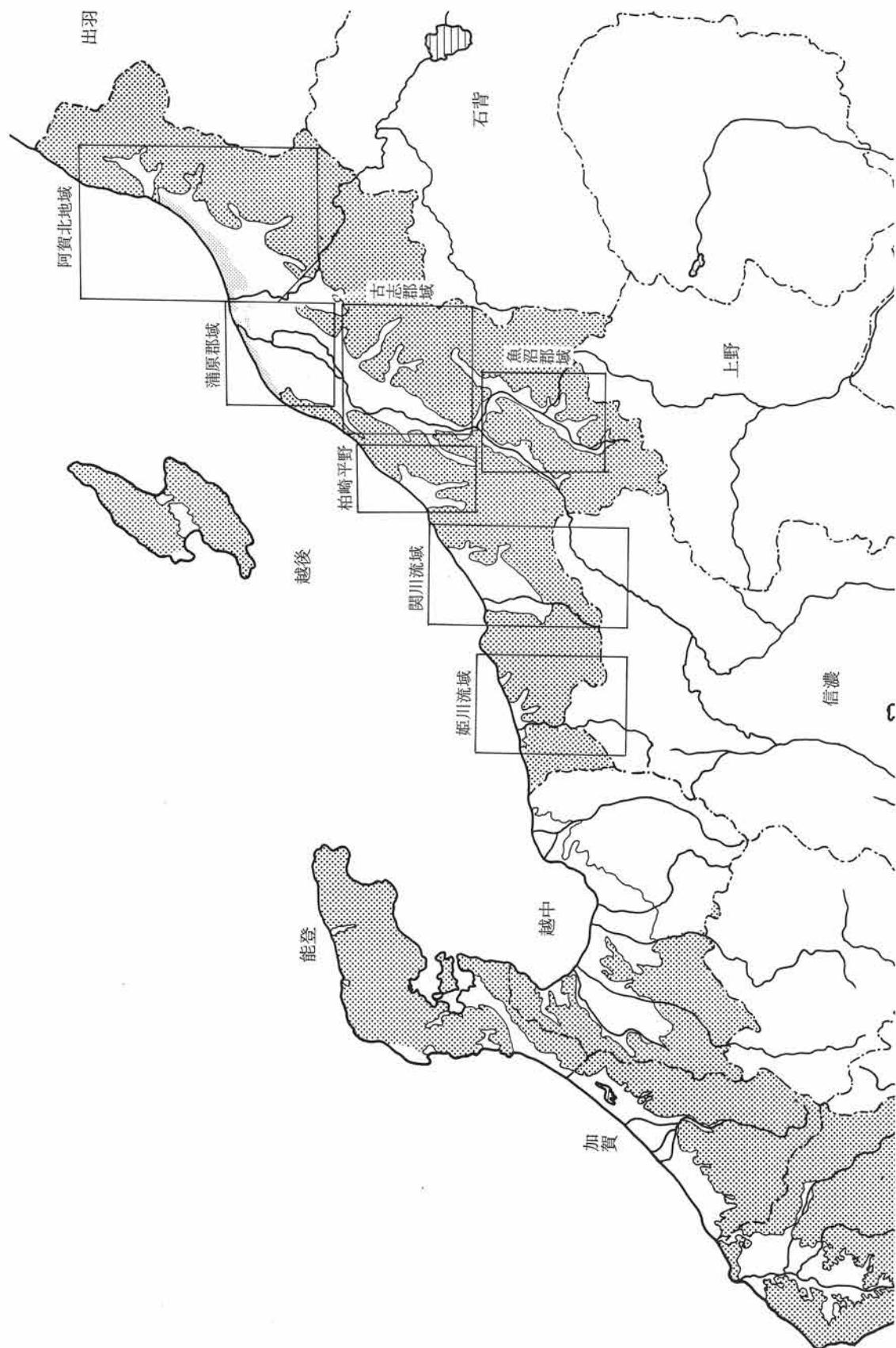
古墳という政治的な象徴としてのモニュメントが誕生する背景には、畿内中央政権の意向が多大に働いたことは多くの研究者が指摘するところである。何をもって古墳とするかという定義は各研究者によって異っているが、大規模な墓という面からのみ捉えれば、既に弥生時代には成立している。しかし、画一化した墓制の誕生を大きな画期とすれば、古墳時代の開始は前方後円墳出現以降とする説が有力となろう〔近藤1983ほか〕。古墳出現前後における社会の変革は、墓制のみならず、祭式土器の統一化や、集落の変化など、様々な面で指摘されている。

こうした社会の変革は、越後においても認められ、墓制では巻町稻場塚古墳の調査成果が特筆される〔稻場塚古墳測量調査団1993〕。稻場塚古墳は全長26.3mと極めて小型ながら、前方部の墳端線が撥形に開くことや、前方部の前端が緩い曲線を呈することから、畿内における最古式の前方後円墳からそれほど時期差を置かずに築造されていたことになる¹⁾。全国的な墓制の変革に遅れることなく、越後でも最古式の前方後円墳が築造されている事実は、重要視すべきであろう。

墓制の変革だけでなく古墳に埋葬された人物や、この古墳の築造に係った人々の生活は、どのように変化していったのであろうか。こうした変化は集落そのものにも表れるであろう。一般に定式化した古墳が築造される以前の集落は、居住域の廻りを濠で囲む「環濠集落」や農耕に極めて不向きな高所に集落を営む「高地性集落」など、外的から身を守る防御的な機能を持った集落（以下、防御的集落）の存在が知られている。防御的集落の存在は戦乱があったことの根拠であり、戦乱の終結後に定式化した古墳が築造されている点は、畿内中央政権の「全国的な統一」を表すものとして注目されている〔都出1983ほか〕。

越後が戦乱の時代にどのような戦いに巻き込まれたか、またどのような役割を持って戦いに参加していたかは不明確であるが、戦乱の痕跡である防御的集落は数多く存在している。川村浩二氏の調べでは、越後では防御的集落が約30遺跡も存在しているという〔川村1990〕。これは、数量的に北陸で最高である。また現状で確認されている防御的集落の日本海側の北限という評価が可能である。越後における古墳出現前夜において、防御的集落がどういった勢力に対する「防衛」を目的としたものか、また「防御的集落」の日本海側における北限という位置付けは、どう評価すべきかなど問題はつきない。

本稿では上記の問題を検討する前段階として、越後の弥生時代後期～古墳時代前期の集落の動向を整理したい。しかし越後における当該期の遺跡の調査例は少なく、また一つの環濠集落内を丸々調査した例は存在しない。一遺跡で今回、検討を行う時期の住居跡を十軒以上にわたり調査した例は聖籠町山三賀II遺跡〔県教委1989〕と、部分的な報告しか行われていないことから詳細が不明な新津市八幡山遺跡〔伊与部1989、新津市教委1994〕が挙げられるにすぎない。集落論を展開するには、甚だ制約が多いのが現状である。将来的に集落の類型化や、集落の内部構造が明らかになると考えるが、ここでは集落論を論じるの前提として、弥生時代後期～古墳時代前期における集落の動向²⁾について検討を試みることにしたい。



第1図 越後の地域区分

2 地域別にみた集落の動向について

遺跡の動向を考えるにあたり、時間軸と地域区分、そして集落の発掘調査状況が大きな問題となる。このうち当該期における時間軸については様々な試案が提示されているが、弥生時代後期～終末期については、未だおおかたの支持を得られるものはない。このため本稿では末消化部分を含むものの、断りがない限り昨年度行われた日本考古学協会新潟大会第2シンポジウム「東日本における古墳出現期の再検討」で設定された新潟シンポ編年を使用する³⁾。

一方の地域区分については、明瞭な設定をしがたいのが現状である。都出比呂志氏が行ったような地域単位の検討[都出1989b]が望ましいが、現状では困難である。このため南北に長い越後の特徴から、平野・河川を単位とし、姫川流域・関川流域・頸城平野、柏崎平野、魚沼郡域、古志都域、蒲原郡域、阿賀北地域の7つに区分した。なお、資料の増加に伴い改善・細分していくことが望ましいのは当然である。

最も問題となるのが、越後における1期～10期にかけての集落跡の調査例が少ないことである。明確にしえない問題が多く存在するが、調査の度合いに応じた以下の定義に基づいて検討を試みたい。

発掘調査が行われて、遺構が確認された遺跡をランクA、発掘調査が行われて遺物が検出されたものの、遺構が確認されていない遺跡をランクA'とする。また試掘調査が行われた遺跡をランクB、分布調査によって今回検討する時期の遺物が確認された遺跡をランクCとする。ランクAについては全て網羅したつもりであるが、ランクA'・B・Cについては見落としたものや、遺物を実見していないため本稿では取り扱わない遺跡も存在する。これは、現状で指摘できることを明確にする立場からである。ランクA'・B・Cについては、特に重要と考えるもの

のみを扱う事したい。

上記の定義に基づいて検討する項目は、以下の二点である。一つは遺跡消長の画期である。これまで比較的明瞭であった時期区分であるが、北陸の土器編年には微妙な違いが生じてきたこと〔田嶋1993〕により、多面的に越後を捉える必要が出てきている⁴⁾。現状では土器編年を十分に解決しえないが、画期の設定については、おおよその時期をつかむようにしたい。・

二点目は集落構成要素の一つである住居跡の構造である。この問題については、川村浩二氏の指摘〔川村1992〕や、品田高志氏の総合的な研究成果が提示されており、大枠はこれに準じる立場にある。ここでは遺跡の消長も踏まえて、北陸内の他地域と比較し、越後の独自性を抽出することにしたい。

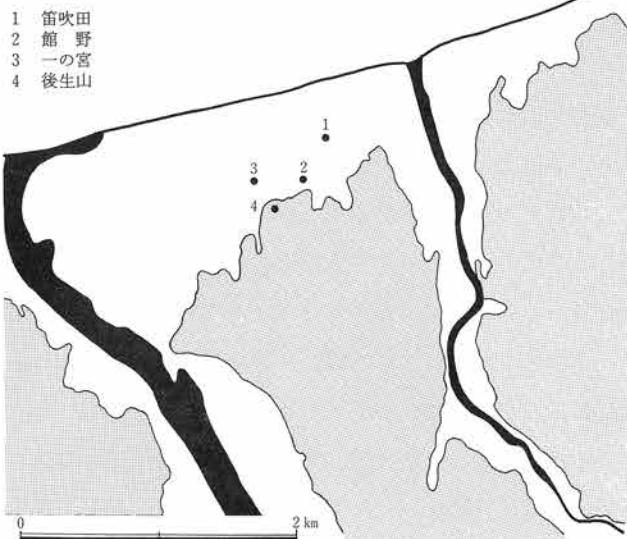
第1表 時期区分

| | | 北陸 | | 南加賀 | 北加賀 | 北陸 | 能登 | 越後 |
|---|----|-----------------|----------------|-------------|--------------|-------------------------|-------------------|--------|
| | | 試案 (加賀地域) | 田嶋 (1986) | 楠 (1992) | 吉岡 (1991) | 板木 (1994) | 坂井・川村 (1993) | |
| 1 | 古 | 1 期 | 前 | | 4期 | (+) V ₁ 期 | V ₂ 期 | I (最新) |
| | 中 | | 後 | | 5期 | | | |
| | 新 | | 前 | | 6期 | | | |
| | | | 後 | | 7期 | | | |
| | | 2 期 | 前 | 古 | 2群 | 8期 | VI ₁ 期 | 7 期 |
| | | | 古 | | | | | |
| | | | 新 | | | | | |
| | | 3 期 | 中 | (+) | 9期 | | | 8 期 |
| | | | 後 | 3群 | 10期 | VI ₂ 期 | | |
| | | 4 期 | | 4群 | 11期 | VI ₃ 期 | VI ₄ 期 | 9 期 |
| | | | | 5群 | 12期 | 古1-1 | | |
| | 5 | 庄内 新段階 以降 | I ₁ | | | | 古1-2 | 1 期 |
| | 6 | | I ₂ | 6群 | | | | |
| | 7 | 1 b | I | 7群 | | | 後半 | 古 新 |
| | 8 | | II | 8群 | | | | |
| | 9 | 2 | I ₁ | 9群 | | | 2 期 | 古 新 |
| | 10 | | I ₂ | 10群 | | | | |

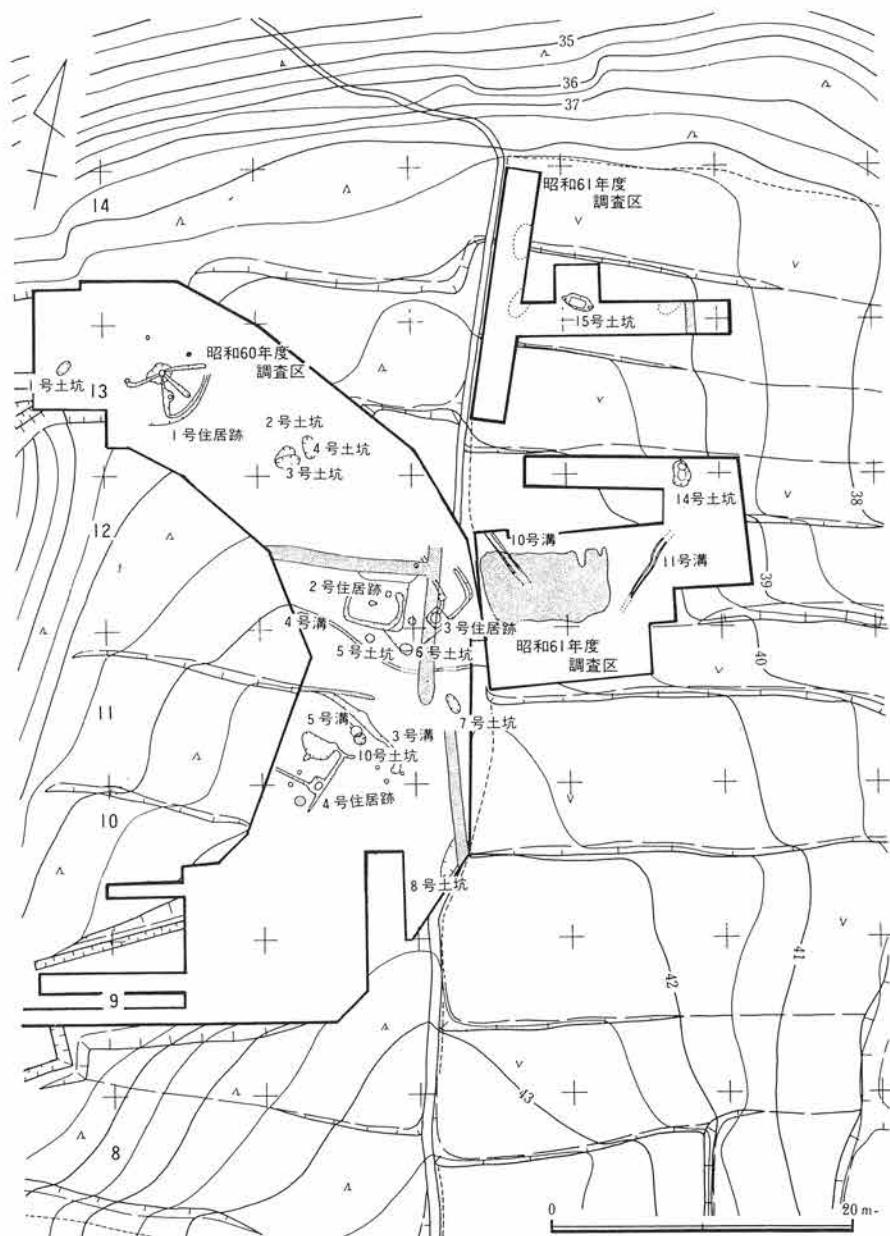
(1) 姫川流域（第2図）

北側が日本海に、西側は白馬山地が日本海まで連なり断崖（親不知海岸）に、南側～東側にかけては西頸城山地に囲まれた地域であり、東北日本と西南日本とを地質的に二分する糸魚川一静岡構造線（フォッサマグナの西端）が、姫川流域付近をほぼ南北に走っている。硬玉の産地として名高い姫川流域では、ランクAの遺跡に糸魚川市後生山遺跡〔糸魚川市教委1986・1987、木島1988〕・笛吹田遺跡〔糸魚川市教委1978・1983・1984〕、ランクCの遺跡に一の宮遺跡〔糸魚川市教委1988〕、館野遺跡〔糸魚川市1986〕がある。現状でこの地域の集落構成は、1期から開始されるようである。

後生山遺跡では4軒の住居跡が検出されており、遺構だけでなく弥生時代後期の土器編年試案を行う場合にも重要な意味を持つ。標高約40m（比高約30m）の丘陵上に位置しており、広義の高地性集落と考えられよう。残存する住居跡の形態は次章以降で触れるが、床面には数条の溝が残ることから、「玉作り工房跡」という推定がなされている〔木島1987〕。検出された土器は、未公表のものが多く時期を明確にしえないが、出土量の多い3号住居跡は、1期(中)、2号



第2図 姫川流域の遺跡分布図



第3図 後生山遺跡全体図（市教委1987より）

第2表 姫川流域の遺跡の動向

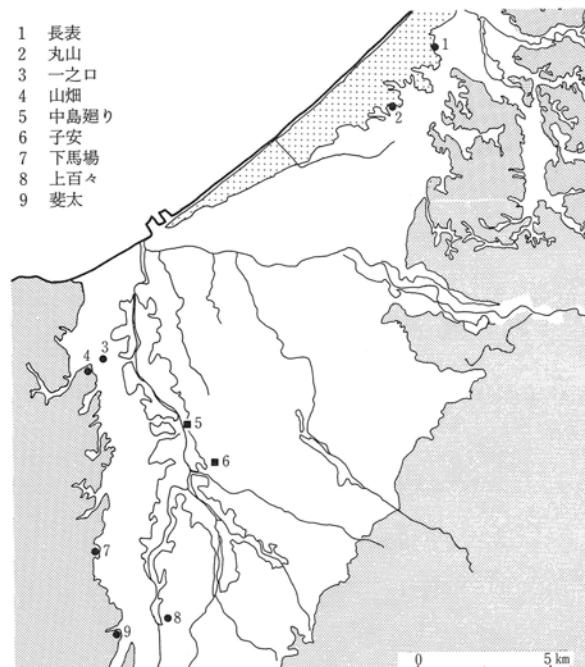
| 遺跡名 | 中期 | 1古 | 1中 | 1新 | 2 | 3・4 | 5・6 | 7・8 | 9・10 | ランク |
|-----|----|----|-------|----|-------|-----|-------|-------|------|-----|
| 笛吹田 | | | | | ■■■■■ | | ■■■■■ | | | A |
| 後生山 | | | ■■■■■ | | | | | | | A |
| 一の宮 | | | | | | | | | | C |
| 館野 | | | | | | | | | | C |

住居跡は2期、4号住居跡は1期（新）～2期の幅で納まると考える。また1号住居跡の出土遺物は、3号住居跡のそれと似た形状を呈することか、同一時期の可能性が指摘されている〔糸魚川教委1986〕。その後の確認調査で検出された土器群も2期を中心としており、現状ではおおむね1期（中）～2期に営まれた玉作り集団の集落と考えられる。

後生山遺跡とは対照的に、標高10m前後の沖積地に位置する笛吹田遺跡は2期の方形周溝墓と、7・8～9・10期以降と長期的に営まれた玉作り跡が展開している。姫川流域の西頸城地域は硬玉の産地で、玉作り遺跡が多く存在することで著名である。古墳時代中期～後期では、糸魚川市三ツ俣遺跡〔木島1989〕・田伏遺跡〔糸魚川市教委1972〕や青海町大角地遺跡〔青梅町教委1979〕が玉作り遺跡として著名であるが、これに先行して営まれたのが笛吹遺跡である。

玉作り遺跡が多いことから、当地域では多くの祭祀遺物が確認されているが、実際に祭祀が行われた可能性の高い「祭祀遺跡」は少ない〔滝沢1993a〕。その中で、式内社である天津神社の境内に位置する一の宮遺跡〔糸魚川市教委1982〕が数少ない例として注目される。正式な発掘調査は行われていないが、滑石製の祭祀遺物が多数検出されている。年代については明確にしえないが、公表された土器は2期、5～7・8期とやや幅を持たせておきたい。

現状では1期（中）から遺跡が認められ、短期間に消滅してしまう。低地への移行は早く、2期には確認されるが、3・4～5・6期の動向は不明である。再び集落が営まれるのは7・8期以降と考えるが、これ以降は玉作り集落を中心として



第4図 関川流域・頸城平野の遺跡分布図(麻柄1983を一部改変)

第3表 関川流域・頸城平野における遺跡の動向

| 遺跡名 | 中期 | 1古 | 1中 | 1新 | 2 | 3・4 | 5・6 | 7・8 | 9・10 | ランク |
|-----|-------|----|----|----|-------|-------|-----|-------|------|-----|
| 斐太 | | | | | ■■■■■ | | | | | A |
| 山烟 | | | | | ■■■■■ | | | | | A |
| 一之口 | | | | | | ■■■■■ | | | | A |
| 下馬場 | | | | | ■■■■■ | | | | | B |
| 長峰 | | | | | | ■■■■■ | | | | A |
| 笠峰 | | | | | | | | | | B |
| 上百々 | | | | | | | | | | (A) |

展開した可能性が高い（第2表）。

（2）関川流域・頸城平野（第4図）

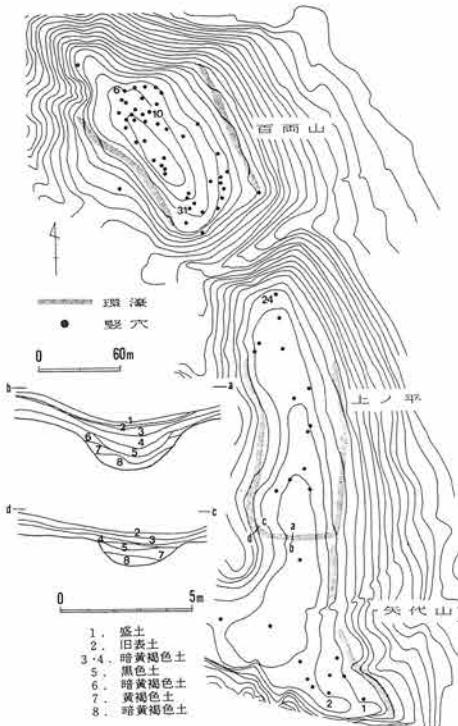
北側には日本海が、西側には南葉山麓に広がる標高2000m以上の山々が、東側は開田山脈に挟まれた地域で、関川・矢代川と二つの河川が南北に走る。確認された遺跡には新井市斐太遺跡群〔駒井・吉田1962〕・上百々遺跡〔新井市教委1990〕、上越市山畠遺跡〔上越市教委1987〕・中島廻り遺跡〔上越市教委1992〕・一之口遺跡〔県教委ほか1994〕・下馬場遺跡〔上越市教委1992〕・子安遺跡〔上越市教委1993〕、中郷村籠峰遺跡〔中郷村教委1987ほか〕、吉川町長峰遺跡〔吉川町教委1986〕、大潟町丸山遺跡〔大潟町教委1988〕などがある。このうちランクAの遺跡は斐太遺跡群、山畠遺跡、長峰遺跡があるにすぎない。籠峰遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土しているが、正式報告は行われていない。

この中で、環濠を伴う高地性集落として名高い斐太遺跡群（第5図）が営まれ始めたのは、中期に下る可能性が高い。遺構は確認されていないが、中期に比定される信濃系の土器や、1期でも（新）段階傾の甕が採集されている。

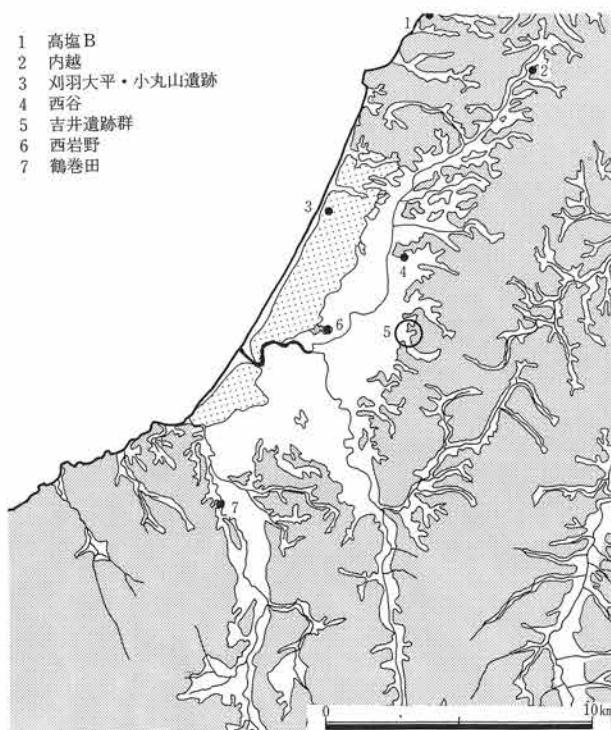
のことから遺構は未確認であるが、中期後半～1期（古）には集落構成が開始され、5期の上ノ平・矢代山24号住居跡まで集落が営まれた可能性が高い〔滝沢1994〕。

斐太遺跡群と同様に遺構が埋まりきらずに地表上で落ち込みとなって確認できる遺跡に、下馬場遺跡がある。標高約40m、比高差約30mで、環濠は未確認であるが4軒の住居跡が検出されている。このうち1軒の竪穴住居跡が部分的に発掘されているが、出土土器は2期の範疇で納まるものである。2期における新集落の出現は、上越市山畠遺跡でも認められる。2期の枠内で住居跡2軒と土坑1基が確認されており、短期間に営まれた集落であろう。

3・4期は明確でないが、5・6期に入り遺跡は増加する。上百々遺跡では中期以外に、5・6期の土器が確認されている。また長峰遺跡では6期の住居跡が、一之口遺跡東地区では5・6期以降の土器が確認されている。籠峰遺跡は明確でないが、外来系の土器群が報告されており〔川村1988〕、9・10期に人の存在が確認されている。



第5図 斐太遺跡群の全体図



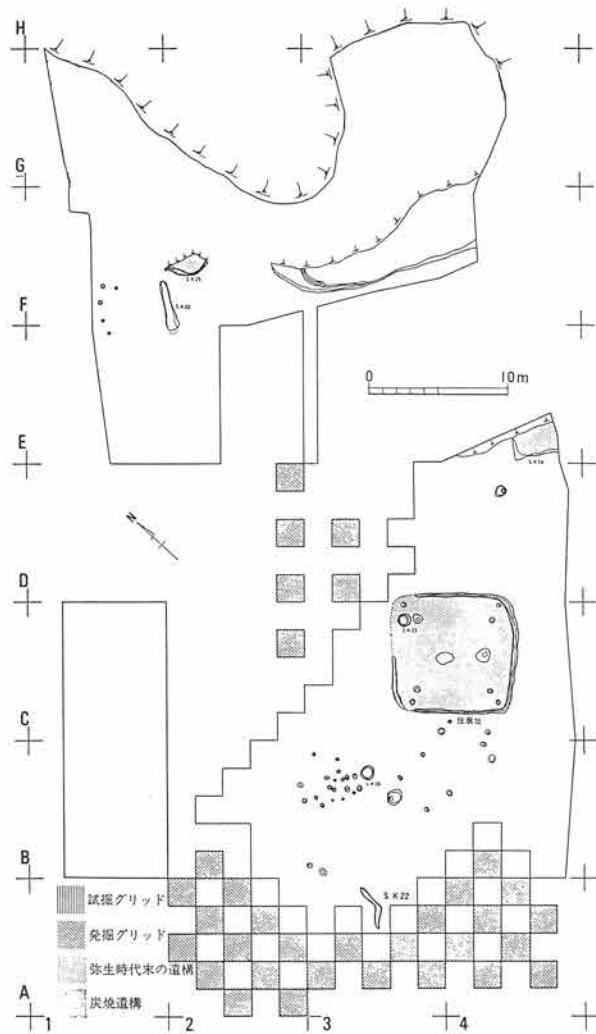
第6図 柏崎平野の遺跡分布図

第4表 柏崎平野における遺跡の動向

| 遺跡名 | 中期 | 1古 | 1中 | 1新 | 2 | 3・4 | 5・6 | 7・8 | 9・10 | ランク |
|-------|-------|----|-------|----|---|-------|-----|-----|------|-----|
| 野附・萱場 | | | | | | | | | | A |
| 西岩野 | | | | | | | | | | A' |
| 戸口 | | | | | | | | | | A |
| 行塚 | | | | | | | | | | A' |
| 鶴巻田 | | | | | | | | | | A' |
| 内越 | | | | | | | | | | A |
| 西谷 | | | | | | | | | | A |
| 高塩B | | | | | | | | | | A' |
| 刈羽太平 | | | | | | | | | | A' |

(3) 柏崎平野 (第6図)

鵜川、鮎石川及びその支流である別山川により形成された沖積平野である。この平野は米山・黒姫山・八石山により三方に囲まれており、北西方向は荒浜砂丘を挟んで日本海側に面している。この地域では住居跡が確認された例は少ないものの、低地に位置する柏崎市野附・萱場遺跡〔市教委1990〕、西岩野遺跡〔市教委1987〕、戸口遺跡〔市教委1990〕、行塚遺跡〔市教委1990〕、鶴巻田遺跡〔県教委1989〕、微高地に位置



第7図 内越遺跡全体図 (県教委1983を一部改変)

する西山町内越遺跡〔県教委1983〕、高塩B遺跡〔町教委1983〕、刈羽村西谷遺跡〔村教委1992〕、砂丘上に位置する刈羽太平・小丸山遺跡〔市教委員1985〕などがあり、今回の検討対象となる遺跡が最も多く確認されている。

当地域では国指定史跡の下谷地遺跡〔県教委1979〕の他にも、野附・萱場遺跡、刈羽太平・小丸山遺跡などで中期から集落構成が開始されている。これらは砂丘上に位置する刈羽太平・小丸山遺跡以外は、いずれも沖積地に位置している。中期に営まれたランク・A'の集落のうち、1期(古)にまで継続する集落は刈羽太平・小丸山遺跡のみである。

1期(古)の遺跡は明確でないが、1期(新)～2期に入ると、戸口遺跡、野附・萱場遺跡、西岩野遺跡、内越遺跡、西谷遺跡などで集落構成が開始されている。部分的な発掘調査であるが、野附・萱場遺跡で検出されたSD-7大溝は、推定幅が4m前後で溝底の形態は明確でないものの、平坦の可能性が指摘されており、環濠状のものと推定されている〔品田1991〕。沖積地の大溝という点では、富山県江上A遺跡〔上市町

教委1981]に類似しており、戦乱に対して防御的な性格をもった溝と推定される。構築時期については溝内出土土器から1期(新)～2期と考えられ、その後、短期間で廃絶された可能性が指摘されている〔柏崎教委1990〕。柏崎平野のうち、沖積地に位置する吉井遺跡群⁵⁾内において当該期の遺跡は、複数時期にまたがるものは多くない。今回の時間軸では2期間にまたがる遺跡は、わずかに戸口遺跡があるにすぎない。

住居跡が確認された内越遺跡も、短期間で消失している。続縄文土器が出土した1号住居跡のみであるが、品田氏が指摘するように〔品田1993a〕、土坑と報告されているものの中にも、住居跡の可能性があるものも存在する⁶⁾(第7図)。しかし、いずれの遺構も2期の範疇に納まるものと考えられ、遺跡の継続性は認められないようである。

柏崎平野で比較的長期間営まれた集落は、西谷遺跡が挙げられるにすぎない。微高地に位置するこの遺跡は、現在では畠地となっている。住居跡は未確認であるが、丘陵縁辺沿いには環濠が確認されている。現状では2期に集落構成が始まり、環濠の機能が停止する5期まで営まれた集落の可能性が高い〔刈羽村教委1992〕。この遺跡で重要な点は、集落の直下に水田が営まれていることである⁷⁾。居住域と、水田という生産の場が近接することは、集落構成を考える上で興味深い。

長期間継続する遺跡は少ないが、集落の動向で5期に画期があることは変わりない。この時期、新たに登場する遺跡には高塩B遺跡、行塚遺跡のほか、刈羽太平・小丸山遺跡でも再度集落が営まれている。これらはいずれも住居跡が確認されておらず、9期を待たずに消滅してしまう。

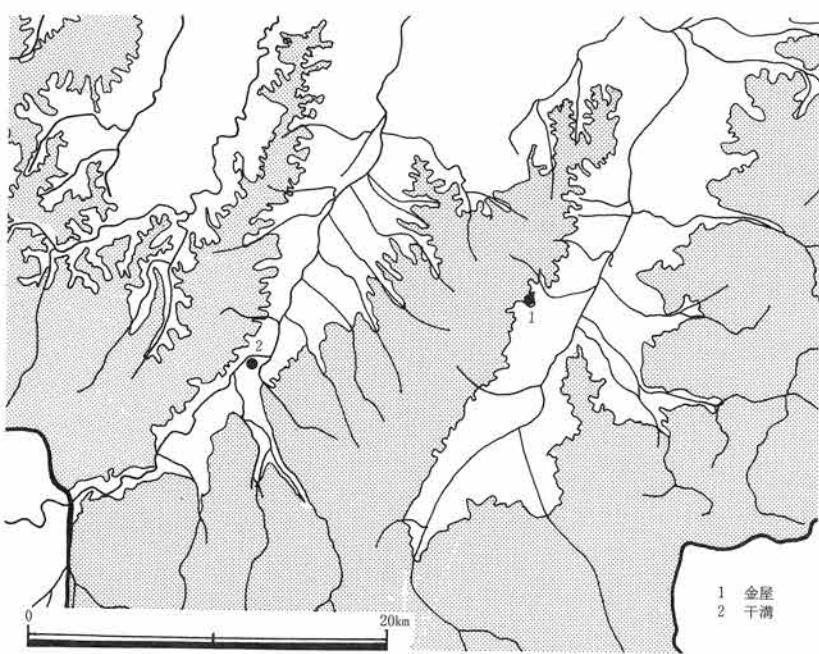
以上、柏崎平野における遺跡の動向について概観したが、比較的長期間にまたがる遺跡は西谷遺跡、高塩B遺跡があるにすぎない(第4表)。これ以外は1～2期間、または1期間で消失するか、または断続的に営まれた短期型の集落である。こうした遺跡は沖積地や砂丘状に位置するものが多く、丘陵状に位置するものが少ないと重要であろう。いわゆる防御的集落の分村や、キャンプ型の集落なのかもしれない。こうした点は次章以降で検討することとしたい。

(4) 魚沼郡域(第8図)

四方を山に囲まれた標高200～300m程の河岸段丘上に位置する。ランクAの遺跡は、六日町金屋遺跡〔県教委1985〕があるに過ぎない。

その他は、ランクCの遺跡が多い。弥生時代中期の遺跡は何例か存在するものの、1期以降では確認された遺跡は限定される。2～4期の動向は明確でないが、5・6期に入ると北陸北東部系土器群が確認されるようになる。

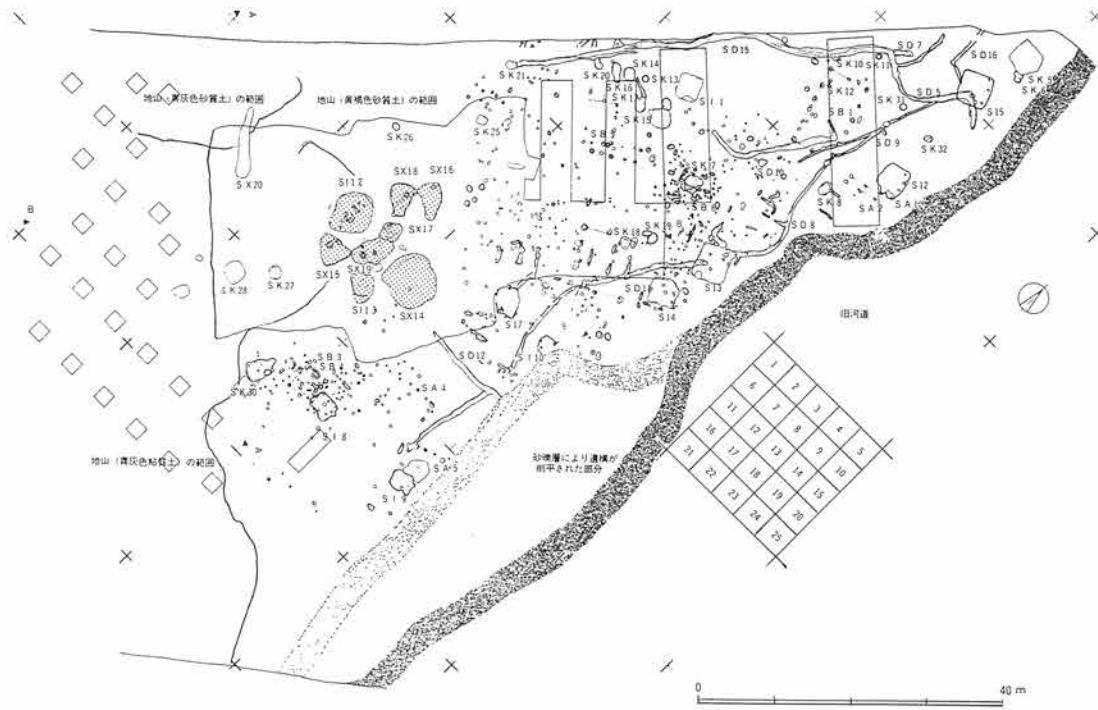
中里村干溝遺跡では、4期以前は信濃系の土器が優位を占めるようであるが、5・6期には北陸北東部系土器群が主体となる。北陸



第8図 魚沼郡域の域分布図

第5表 魚沼郡域における遺跡の動向

| 遺跡名 | 中期 | 1 古 | 1 中 | 1 新 | 2 | 3・4 | 5・6 | 7・8 | 9・10 | ランク |
|-----|----|-----|-----|-----|---|-----|-------|-----|------|-----|
| 干 溝 | | | | | | | | | | (A) |
| 金 屋 | | | | | | | | | | A |



第9図 金屋遺跡全体図（県教委1985より）

北東部系土器群が5・6期に、いかに広がりを見せるかを表している。

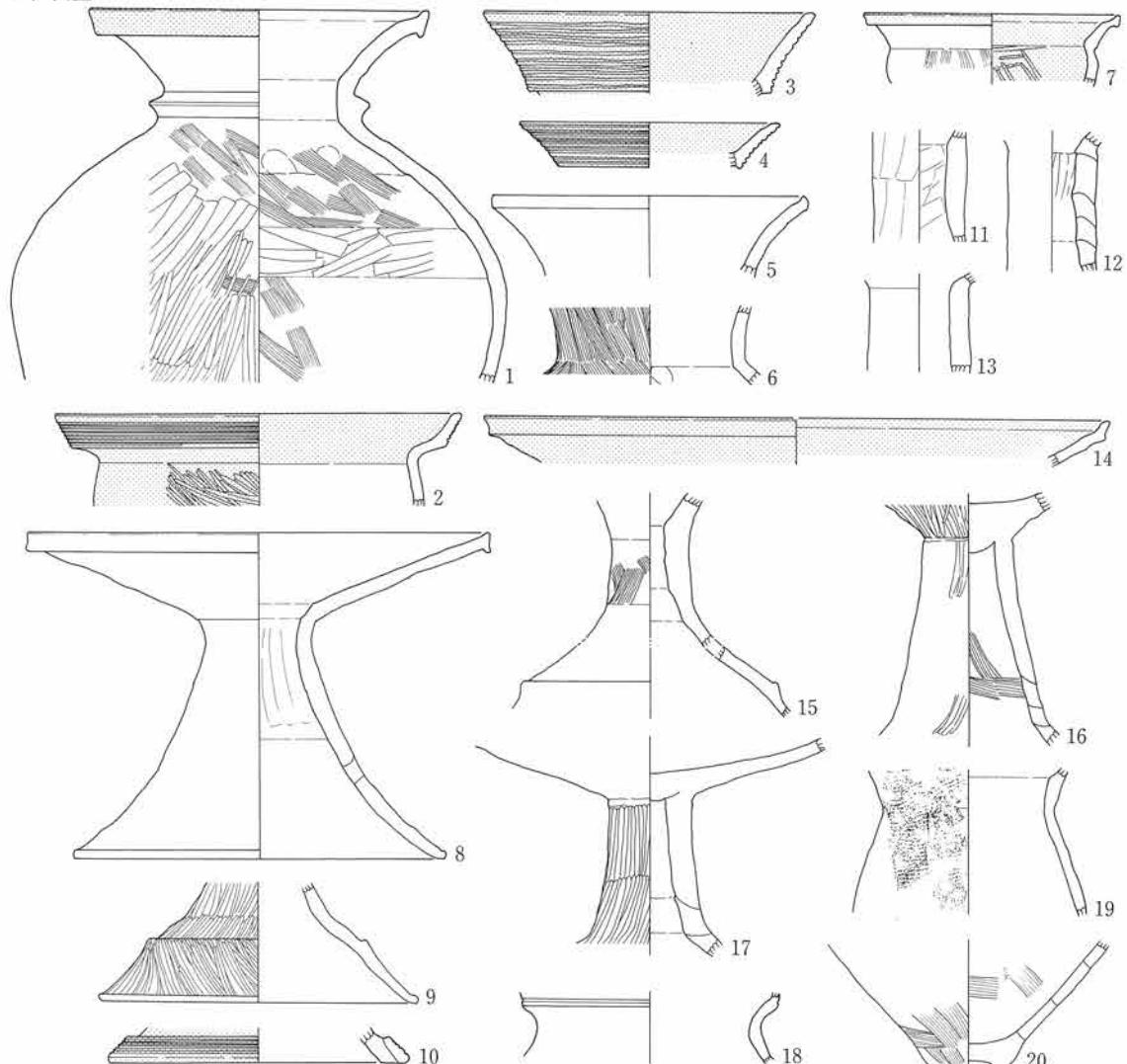
当地域における北陸北東部系土器群の盛行は短期間に終焉を迎える。9・10期の金屋遺跡では、およそ北陸系とは無縁の土器群が登場する。この集落は隣接する蟻子山古墳群〔金子ほか1977〕との関連が指摘されているが〔県教委1985〕、発掘調査範囲で直接関連する時期の遺構は確認されていない。また住居跡は、同時併存するものが2～3軒と考えられておりと、環濠を巡らした防御的集落とは一線をかす。

(5) 信濃川中流域

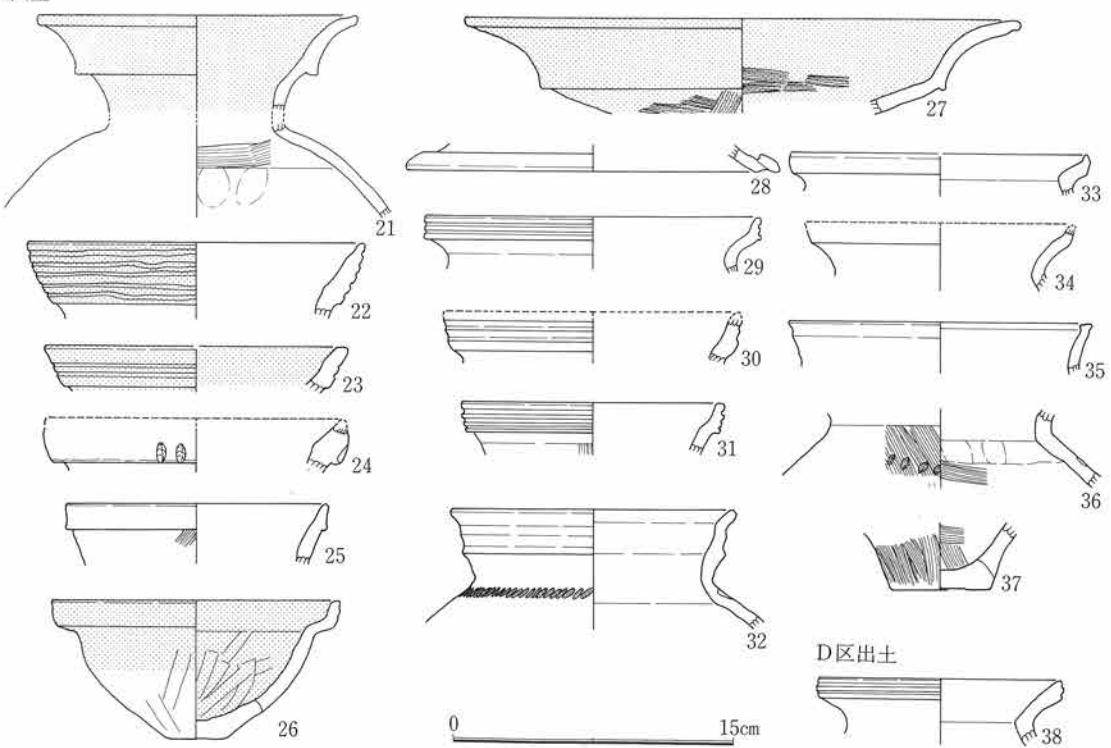
東山山麓を中心に多数の集落が確認されている。これらは平野部との標高差が著しく、防御的集落の密集地である。ランクA・A'・Bの遺跡には見附市大平城遺跡⁹⁾〔県教委1974〕、岩沢遺跡・高稻場遺跡〔見附市教委1988〕、和島村奈良崎遺跡〔藤巻1993〕、三条市経塚山遺跡¹⁰⁾・狐崎遺跡〔金子1981〕、長岡市横山遺跡〔長岡市1992ほか〕などが、ランクCの遺跡には島崎川流域の舞台島遺跡、諏訪田遺跡、横瀧山遺跡、桐原神社遺跡、山王B遺跡、上桐神社遺跡、松の脇遺跡、太平遺跡、城遺跡〔田中1989〕などがある。このうち環濠の掘削時期は不分明なもの、中期から集落の構成が開始される遺跡には高稻場遺跡や奈良崎遺跡、横山遺跡（第12図）がある。一方、太平城遺跡（第13図）や経塚山遺跡などは、発掘調査範囲が限定されており明確にはできないが、1期（新）～2期に入り集落を構成するようである。

中期から集落構成を開始する遺跡のうち、横山遺跡は5期に入って環濠の機能が停止するようである。これは4期に住居跡が消失し、5期に環濠の機能が停止することを意味しない。現状では住居の廃絶・環濠の機能停止は、いずれも5期内での出来事と考える。すなわち、同じ5期という枠内で考えれば、なおも環濠集落内で生活していた人と、新たに5期に入り集落を営む人が存在していたことになる。

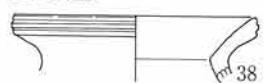
B区出土



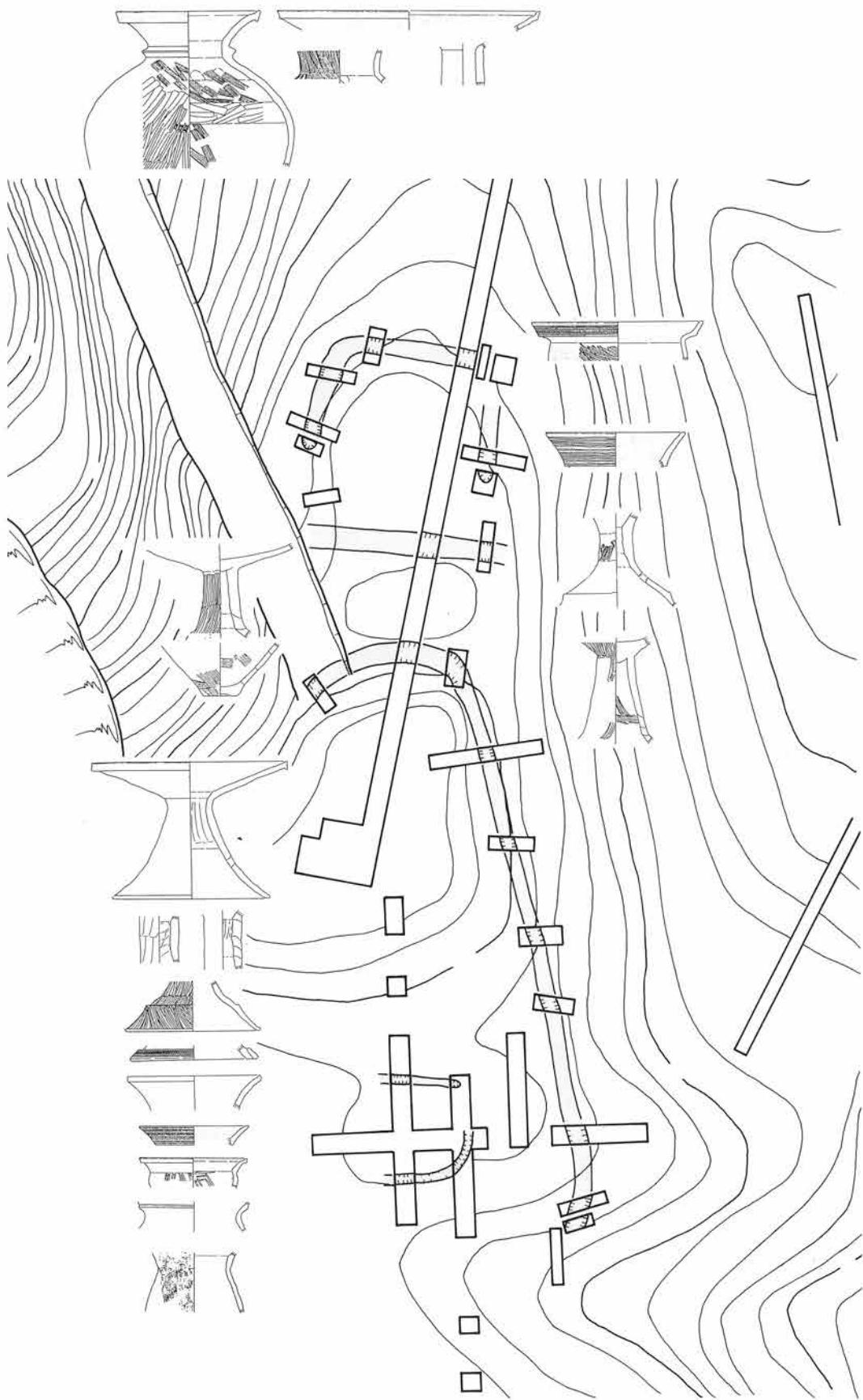
C区出土



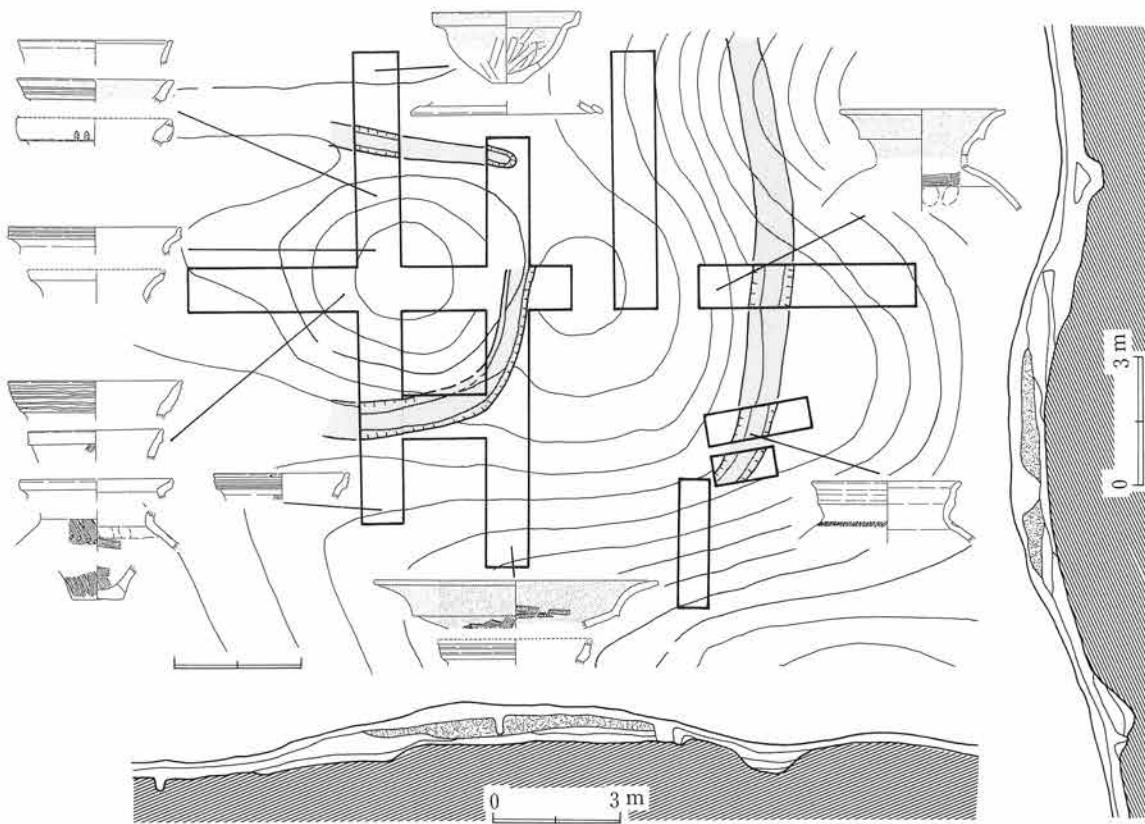
D区出土



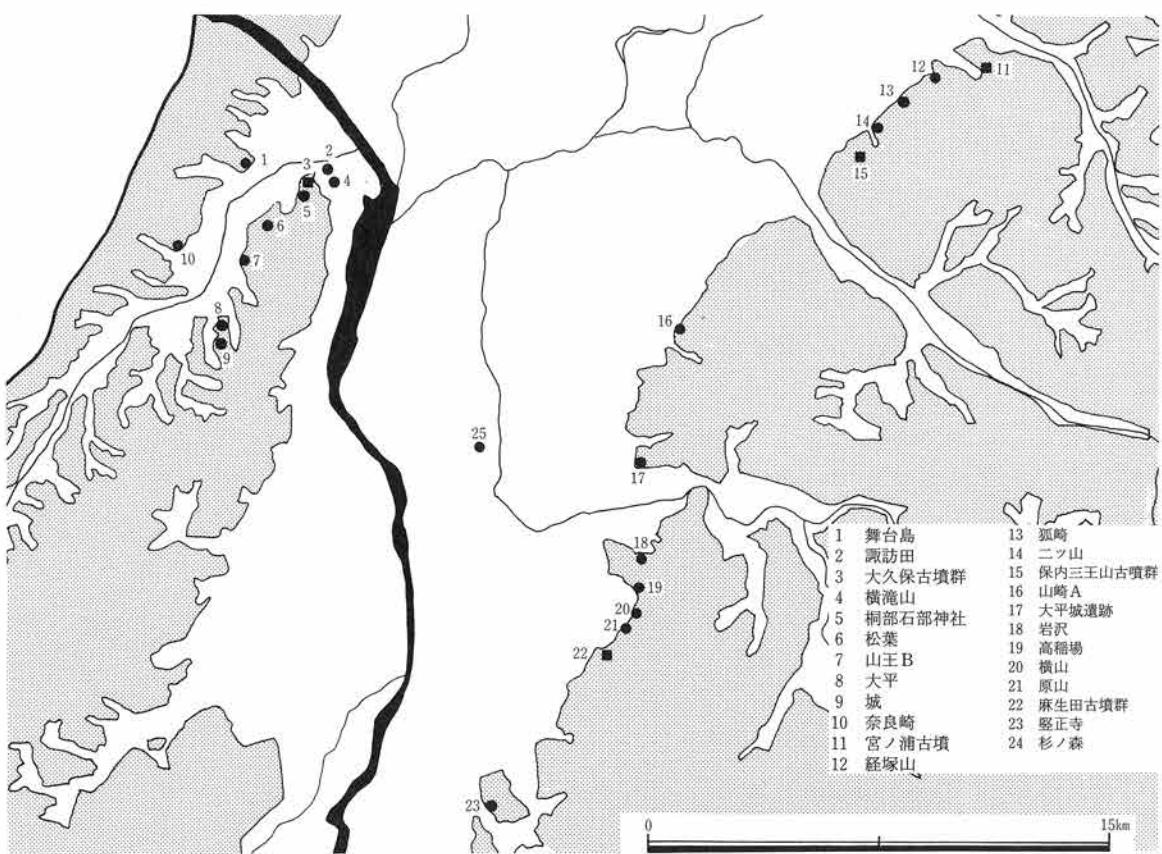
第10図 大平城遺跡出土土器



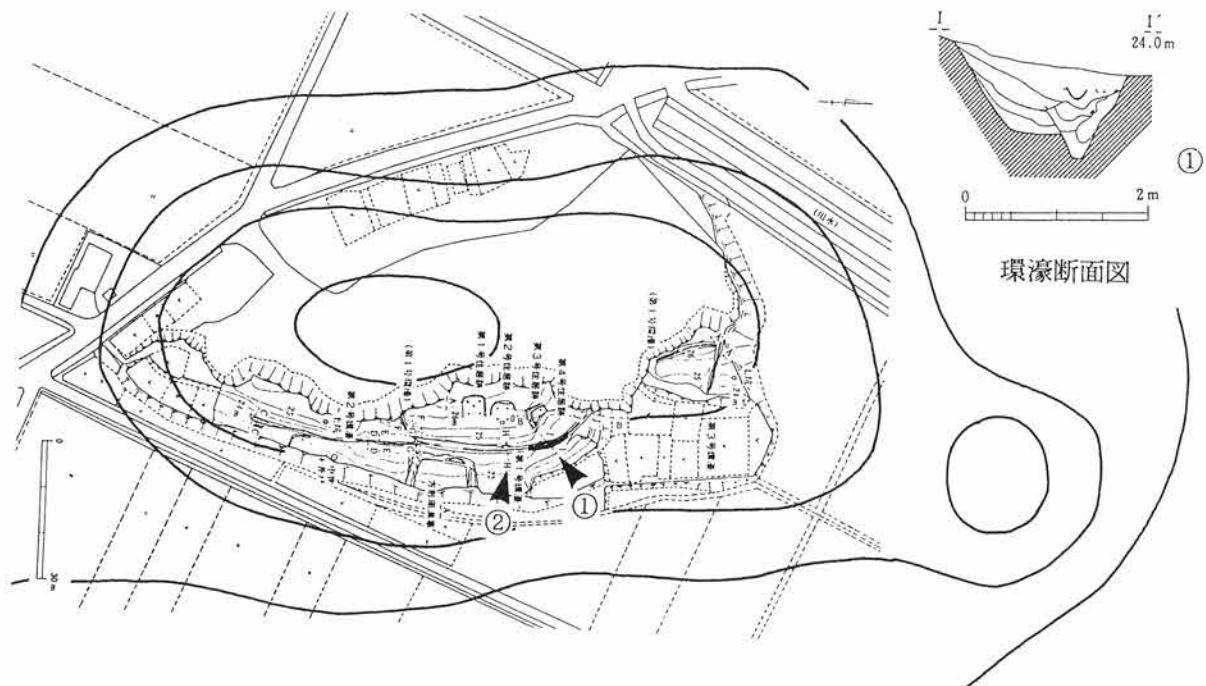
第11図 大平城遺跡全体図（県教委1974を一部改変）



第12図 太平城遺跡C区全体図（県教委1974を一部改変）



第13図 古志郡域の遺跡分布図



第14図 横山遺跡遺構配置図（広井1993aを一部改変）

5期以降の集落については明確でないが、集落の拡散現象が進むなかで狐崎遺跡が登場している。この遺跡も長期間に及ぶものではなく、2～3期間で消滅しているようである。調査例が少ないとことから、この後の動きを明確にしえないが、5～6期に入り登場する杉ノ森遺跡〔県教委1973〕などがあるが、10期をこえるものは、ごくわずかに減ってしまう。

(6) 蒲原郡域（第14図）

信濃川と阿賀野川が合流し、日本海に注ぐ地域のほか、阿賀野川下流域や弥彦山・角田山山麓など、広い地域を範囲に含めた。

中期の土器が検出された遺跡はわずかで、いずれもランクCの遺跡である。ランクA・A'の遺跡は、いずれも1期（古）に入ってから登場している。

新津市八幡山遺跡は環濠を伴う高地性集落であり、住居跡20数軒のほかに、前方後方形周溝墓が確認されている¹¹⁾（第15図）。報告書は遺構編のみ刊行されているが〔市教委1994〕、細かな時期は不明である。一部に報告された遺物は1期～4期・5期に下る例も存在するようである〔伊与部1989〕。多くの防御的集落と同様に、5期まで継続していた可能性が高い。

防御的集落が5期まで継続するのは、巻町大沢遺跡〔大沢遺跡調査団1981ほか〕も同様である。調査された遺構は少ないものの、住居跡の変遷を追える数少ない遺跡として注目される（第16図）。防御的集落という形をとる中で、5期に入り住居跡の平面プランが隅丸方形から方形に変わっている。新しい情報の入り方を考える上で興味深い。この点は次章以降で検討することにしたい。

この他、高地性集落としては巻町山谷古墳下層遺跡〔新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室1993〕や五泉市大倉山遺跡〔五泉市史編さん委員会1994〕などが確認されている。いずれも遺構は確認されていないが、前者の出土遺物は1期（新）～2期、後者は検出された土器が細片のため、時期を明確にしえないが、実測図から判断すれば2期～5期まで継続した集落である可能性が高い。

防御的集落以外で比較的長期間にわたって継続する遺跡に、新潟市六地山遺跡〔新潟市史編さん原始古

第6表 古志郡域における遺跡の消長

| 遺跡名 | 中期 | 1古 | 1中 | 1新 | 2 | 3・4 | 5・6 | 7・8 | 9・10 | ランク |
|------|-------|-------|----|----|-------|-------|-----|-----|------|-----|
| 大平城 | | | | | | | | | | A |
| 岩沢 | | | | | | | | | | B |
| 高稻場 | | | | | | | | | | B |
| 奈良崎 | | | | | | | | | | (A) |
| 経塚山 | | | | | | | | | | (A) |
| 狐崎 | | | | | | | | | | A |
| 山崎A | | | | | | | | | | |
| 横山 | | | | | | | | | | A |
| 舞台島 | | | | | | | | | | C |
| 諏訪田 | | | | | | | | | | C |
| 横瀧山 | | | | | | | | | | A' |
| 桐原神社 | | | | | | | | | | C |
| 山王B | | | | | | | | | | C |
| 太平 | | | | | | | | | | C |
| 城 | | | | | | | | | | C |
| 杉ノ森 | | | | | | | | | | A' |

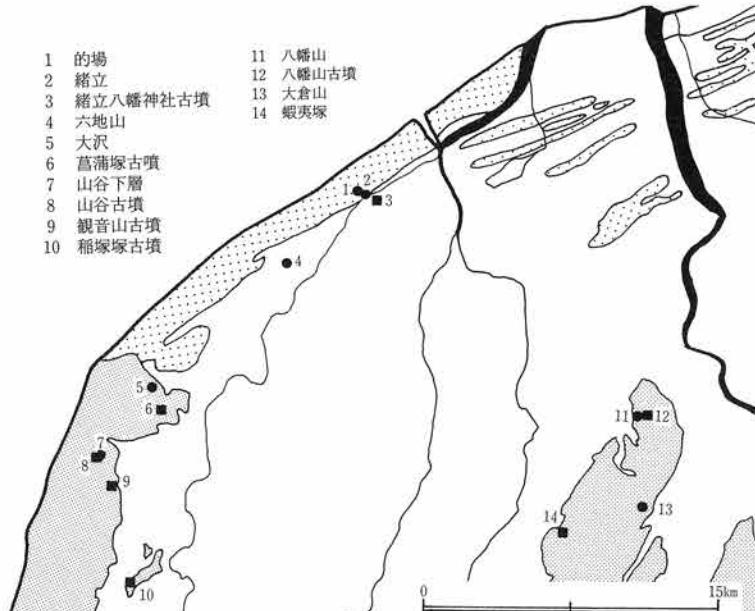
代中世部会1994ほか]がある。ランクA'の遺跡であるが、1期～5期までと長期間にわたり継続している。1期の段階では東北南部系の土器が確認されている他に、アメリカ式石鏃が多数検出されており、北陸系土器群とあわせ、分化の融合地域として評価できよう。

5期から集落が営まれる遺跡に、砂丘上に位置する黒崎町緒立遺跡〔黒崎町教委1983ほか〕、新潟市湯の場遺跡〔新潟市史編さん原始・古代・中世部会1994〕、巻町南始赤坂遺跡〔前山1994〕、可能性のある

ものに越王遺跡〔新潟県1986〕などがある。このうち緒立遺跡との場遺跡は、隣接することから同一集落として考えるべきかもしれない。両遺跡は、いずれもランクAの遺跡である。

緒立遺跡で正式報告された住居跡（2号～4号住居跡）は、5～7期のものである。また包含層からの出土遺物や、これまで報告された遺物や〔永峰・磯崎1965〕、緒立C遺跡〔黒崎町教委1993〕には若干新しい時期のものが含まれている可能性もあるが、現状では8期で終結する集落と考えておきたい。

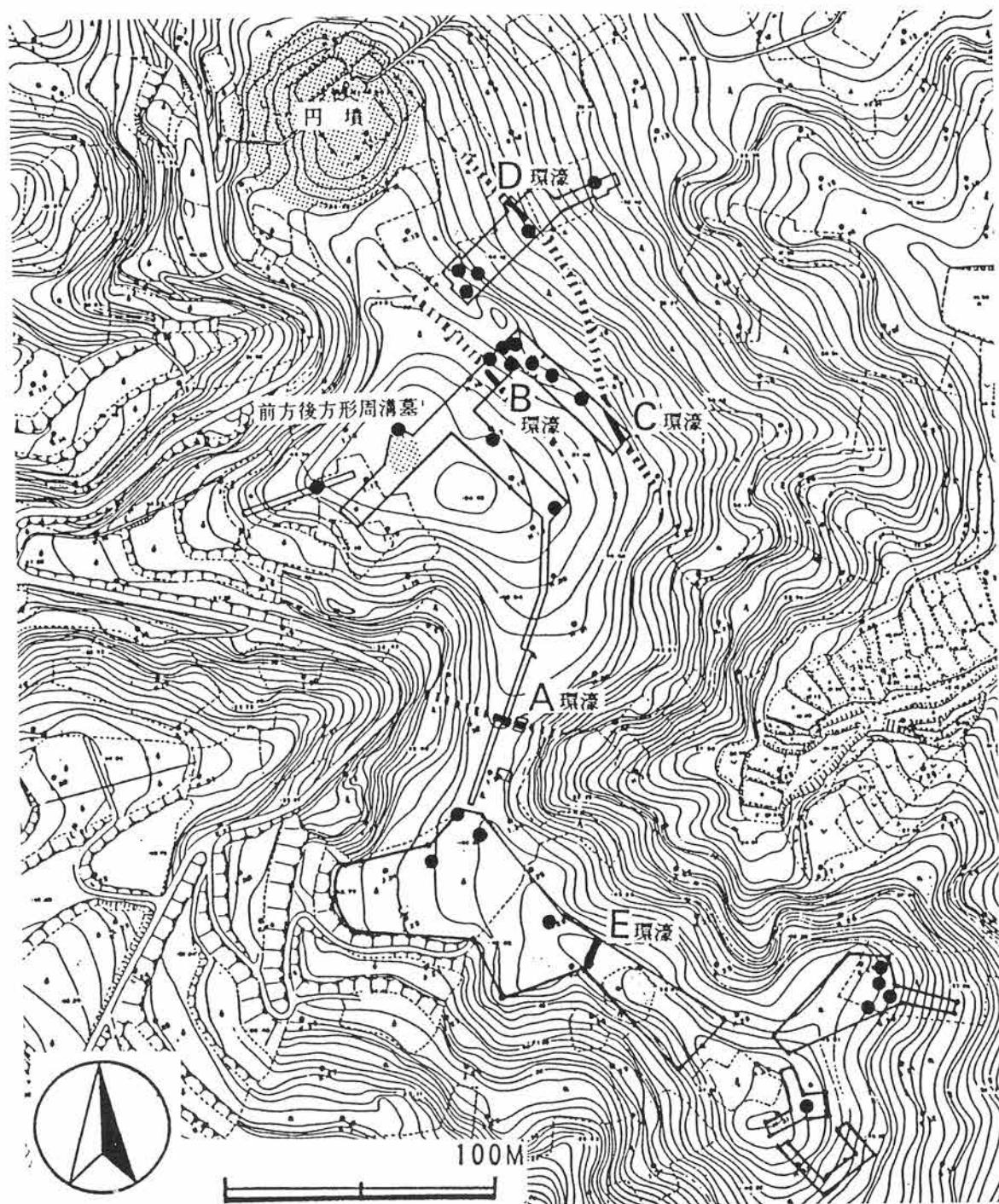
一方の的場遺跡は正式報告が行われていないが、公表された遺物を見る限りでは、緒立遺跡と同様な傾



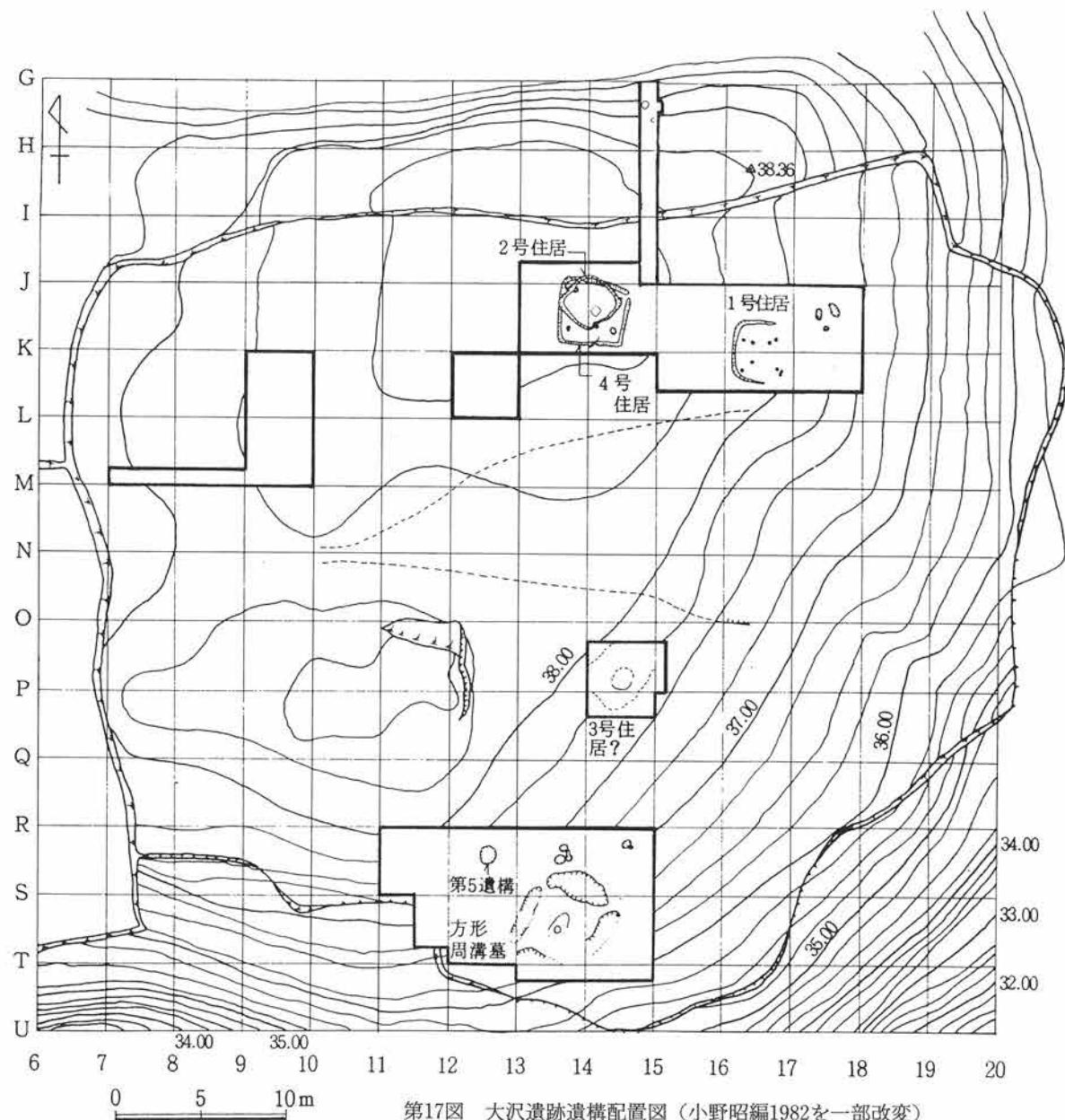
第15図 蒲原郡域の遺跡分布図

第7表 蒲原郡域における遺跡の消長

| 遺跡名 | 中期 | 1古 | 1中 | 1新 | 2 | 3・4 | 5・6 | 7・8 | 9・10 | ランク |
|-----|----|----|----|----|-------|-----|-----|-------|------|-----|
| 八幡山 | | | | | | | | | | (A) |
| 大倉山 | | | | | | | | | | |
| 六地山 | | | | | | | | | | A' |
| 大沢 | | | | | | | | | | A |
| 緒立 | | | | | | | | | | A |
| 的場 | | | | | | | | | | A |



第16図 八幡山遺跡遺構配置図（伊与部1989を一部改変）



第17図 大沢遺跡遺構配置図（小野昭編1982を一部改変）

向を示すようである。古墳時代中期・後期の土器が若干は認められるものの、前期（7～8期）との間には断絶が認められる。緒立・的場の両遺跡は5期から集落構成を開始して、おおむね8期を持って終結する集落と考えておく。

県内に主要な前期古墳が集中する巻町～弥彦村では、近年になって縄文式土器が数多く確認されて著名となった巻町南赤坂遺跡がある。住居跡3軒の他に、土坑を取り囲む掘立柱建物が検出された「テラス遺構」がある。正式報告が行われていないが、公表された資料によれば、これらの遺構は8～9期が主体であるという〔前山1994〕。また3軒の住居跡のうち、1号住居跡は9期という。おおむね7・8～9・10期を主体とした遺跡であろうか。また南赤坂遺跡の西方約300mには、玉作り関連資料が多数確認されている越王遺跡〔新潟県1986〕がある。土器が明確でないことから細かな時期比定は困難であるが、剥片の形状から古墳時代前期と考える。5期以降、玉作りのあり方が変化している中で、古墳時代有力古墳が集中する地域での遺跡だけに、その評価が問題となろう。

(7) 阿賀野北地域

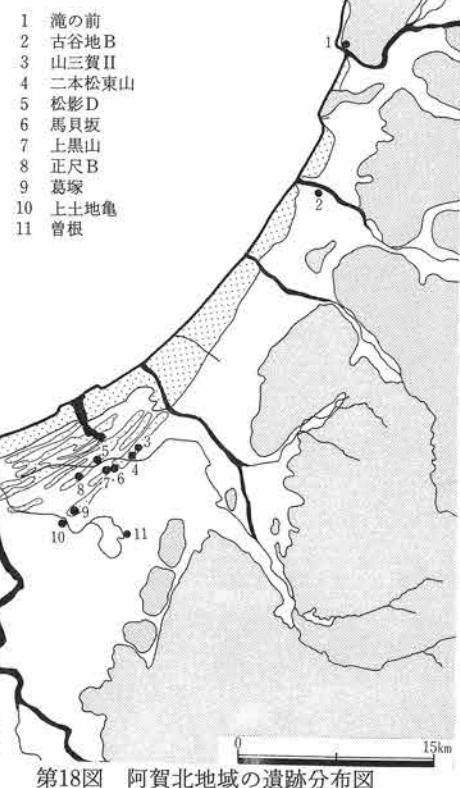
阿賀野川流域から北部の地域を一括して本地域とした。今回の越後の区分では、最も広範囲に及ぶ地域である。各河川が砂丘を横断できずに阿賀野川に流れ込み、ひいては信濃川に合流する地点であることから、三面川周辺の遺跡とは区分すべきとも考えるが、ここでは阿賀北地域として扱いたい。

1期～2期の遺跡では村上市滝ノ前遺跡〔村上市教育委員会1972〕がある。ランクAの遺跡であるが、正式報告が行われていない。概報によれば住居跡は3軒確認されており、いずれも円形プランを呈する。細かな時期は明確でないが、1～2期の東北南部系の土器以外に、写真で掲載されている土器には5期前後のものも存在するようである。

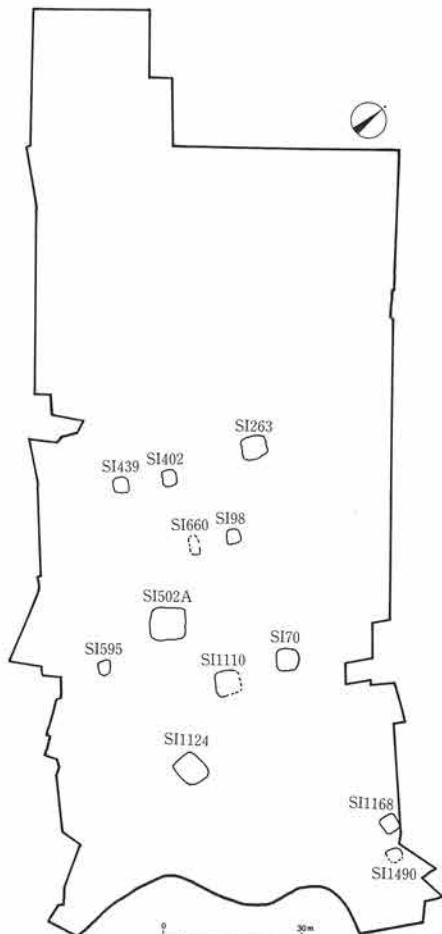
5期以降における遺跡数の増加は阿賀北地域で特に顕著である。ランクAの遺跡には山三賀II遺跡〔県教委1989〕、二本松東山遺跡〔聖籠町教委1993〕、ランクA'の遺跡には豊浦町曾根遺跡〔豊浦町教委1981・1982〕、豊栄市上土地龜遺跡〔豊栄市教委1993〕、ランクCの遺跡には豊栄市葛塚遺跡・松影D遺跡・上黒山遺跡遺跡、新発田市馬見坂遺跡・正尺B遺跡〔阿部1989ほか〕などがある。このうちランクA・A'の遺跡は集落の開始時期が異なるようである。曾根遺跡では5期から集落が営まれるが、山三賀II遺跡(第19図)・上龜地遺跡では7・8期に集落が登場する。前者は7・8期で終焉を迎えるが、後者は10期以降も継続している。終焉時期は明確でないが、集落構成の開始時期には2通りありそうである。

この時期の集落を検討する場合、山三賀II遺跡では住居跡が十数軒確認されており、特に注目される。坂井秀弥氏によれば一時期に併存する住居跡は2～3軒であるという。また、農耕を営むには極めて不向きな立地に集落が営まれていることから、外的要因（中央の権力か）によってこの地に集落を構成せざるなかった計画的な村落と評価している〔坂井1989〕。

一方、荒川流域の沖積地には荒川町古谷地B遺跡がある。居住域ではないと考えるが、数条の溝が作られており、9期～10期程の土器が確認されている。農耕係る遺跡であろうか。



第18図 阿賀北地域の遺跡分布図



第19図 山三賀II遺跡古墳時代前期の遺構配置図（県教委1989を一部改変）

第8表 阿賀野北地域における遺跡の消長

| 遺跡名 | 中期 | 1古 | 1中 | 1新 | 2 | 3・4 | 5・6 | 7・8 | 9・10 | ランク |
|-------|----|----|----|----|---|-------|-------|-----|------|-----|
| 滝ノ前 | | | | | | | | | | (A) |
| 山三賀II | | | | | | | | | | A |
| 二本松東山 | | | | | | | | | | A |
| 曾根 | | | | | | | | | | A' |
| 上龜地 | | | | | | | | | | A' |
| 葛塚 | | | | | | | | | | C |
| 松影D | | | | | | | | | | C |
| 上黒山 | | | | | | | | | | C |
| 馬見坂 | | | | | | | | | | C |
| 正尺B | | | | | | | | | | C |
| 古谷地 | | | | | | | | | | A |

3 遺跡の消長について

これまで越後における集落の動向については、遺跡数が少ないとのみならず、集落を捉えていく上で基礎となる時間軸が不明確であったことから、活発な議論は生まれなかった。しかしここ数年における遺跡数の増加は、土器編年の設定〔坂井・川村1993〕や、防御的集落の様相〔川村1990〕、当期の集落研究の現状と課題が提示されるようになっている〔品田1993〕。こうした先学の研究成果を基に、遺跡の消長の類型化を試みたい。

(1) 長期継続型

今回の検討で採用した時期区分で、5期間以上に及ぶ遺跡を長期継続型の遺跡とする。各地域の様相を検討した結果では、5期に大きな画期が存在する。5期の画期については後ほど触れるが、現状で確認できる長期継続型の遺跡は、①中期後半又は、1期から集落の構成が開始されて5期まで継続する遺跡と、②5期以降に集落構成が開始されて5期間以上に及ぶ集落とに別れる。便宜上、①を長期継続型A、②を長期継続型Bとする。また現状では明確でないが、5期に断絶が認められず、継続して集落が営まれた可能性があるものを長期継続型Cとする。

〈長期継続型A〉

姫川流域・魚沼郡域・阿賀北地域では未確認であるが、各地域の防御的集落が圧倒的に多い。5期をもって終了する集落のうち、現状で中期後半から集落構成が始まる可能性のある遺跡には関川流域の斐太遺跡群、信濃川中流域の横山遺跡・奈良崎遺跡、1期から集落構成が始まる可能性のある遺跡には蒲原郡域の八幡山遺跡・六地山遺跡がある。集落構成の開始期が異なるのは、蒲原郡域とそれ以外の地域の差なのであろうか。今後、検討すべき問題と考える。

〈長期継続型B〉

防御的集落の機能が停止して新たに集落を構成する遺跡のうち、長期間にわたり集落が営まれる長期継続型Bには関川流域の一之口遺跡、阿賀北地域の山三賀II遺跡が挙げられるにすぎない。

長期継続型に属する集落は、比較的広範囲にわたって調査が行われたものが多いことから、越後における調査の状況によって多分に限定される。これは、上記の二遺跡においても同様である。集落構成の開始

時期は、一之口遺跡が5期なのに対して、山三賀II遺跡は8期からである。しかし山三賀II遺跡の南側、直線距離にして約500mに営まれた二本松東山遺跡では、5・6期の方形周形墓・円形周形墓が営まれている。山三賀II遺跡における5・6期の様相は不明確であるが、二本松東山遺跡を山三賀II遺跡で生活していた人々の墓域とすれば、山三賀II遺跡の集落構成の開始は5・6期頃からであった可能性もある。これらの2遺跡はいずれも10期以降（漆町編年の12群頃）まで継続していた集落である。

古墳時代の開始については諸説あり、今回の時期区分でどの時期にあたるかは明確にしえない。越後の土器様相から社会の大きな変革を5期と予想する坂井・川村両氏の考え方〔坂井・川村1993〕に従えば、古墳時代の初頭・前期～中期初頭まで継続したのが山三賀II遺跡、一之口遺跡という評価が可能である。

〈長期継続型C〉

正式報告が行われていないこと、調査範囲が狭いこと、遺物が散在的に分布するのみなどのことから明確でないが、長期継続型Cの可能性がある遺跡には、姫川流域の玉作り集落である笛吹田遺跡と、柏崎平野の刈羽大平・小丸山遺跡などがある。

笛吹田遺跡は2期、7・8期～9・10期の土器が確認されている。調査範囲が限定されているため制約も多いが、5期を前後する時期も継続して営まれた可能性もある。一方の刈羽大平・小丸山遺跡では、中期後半（畿内第IV様式併行期）～古墳時代中期までの土器が確認されている。中期後半以外の土器の出土量は少なく、遺構が確認されていないことから定住的な集落の可能性は極めて低い。遺跡は海辺の砂丘上に立地しており、キャンプ的な性格が強いと考える。現状では明確でない長期継続型Cの遺跡は玉作り遺跡やキャンプ的な遺跡である可能性が高く、一般集落とは異なった消長をたどる可能性もある。

(2) 短期継続型

今回の時期区分では1～4期間程しか存続しない遺跡がある。これを短期継続型とする。短期継続型とした遺跡の中には、長期継続型と同様に5期以前のもの（短期継続型A）と、5期以後のもの（短期継続型B）がある。また①1～2期間のみの遺物が確認された遺跡、②3～4期間に継続する遺跡、③2～3期間に継続したのちに断絶があり、再び短期間に営まれたものなどの細分が可能である。しかし、前述のとおり越後における調査の現状は、遺跡の全容を解明するものではなく、部分的な調査が終わっているものが大半である。短期継続型とした集落の中にも、今後の調査次第では長期継続型に属するものも現れるかもしれない。このため対象とする遺跡は、A・A'の遺跡を中心とする。また同じ短期継続型でも様々な分類は可能であるが、5期を境にしてそれ以前を短期継続型A、以後を短期継続型Bに大別するにとどめ、細分を行わず①～③を含めて短期継続型の集落としたい。

〈短期継続型A〉

防御的集落と、そうでない集落がある可能性がある。このうち前者は調査例が少ないと、部分的な調査しか行い得ない遺跡が多いこと、ランクB・Cの遺跡であることなどから、現状では短期継続型に分類せざるえないものも含まれている。例えば刈羽村西谷遺跡などは2期～5期まで継続した防御的集落であるが、今後に1期の遺物や遺構が検出されれば、長期継続型Aの集落という位置付けとなる。多分に不確定要素を含むことを念頭におき、検討を行うこととしたい。

（防御的集落）

防御的集落のうち、短期継続型の範疇で捉えられる遺跡は明確でなく、わずかに姫川流域の後生山遺跡が挙げられるにすぎない。平坦部との比高差が30m以上あることから、防御的集落という位置付けが可能であるが、玉作り集落と考えられることから、一般的の防御的集落とは同等に扱うことができない。

ランクAの防御的集落のうち、住居跡が確認された遺跡において、2～3期間で終了する集落は明確でない。ただし防御的集落の終了時期に注目すれば、すべての防御的集落が5期まで継続したとは断言できず、柏崎平野の萱場遺跡や、信濃川中流域の大平城遺跡のように2期で終了した可能性の高い集落も存在する。萱場遺跡・大平城遺跡などは、防御的集落でも短期継続型の集落であった可能性が高い。

(防御的集落以外)

短期継続型の集落のうち大部分は防御的集落以外の遺跡である。これらは、調査範囲が限定された遺跡も多いが、柏崎平野の西岩野遺跡・内越遺跡などが可能性が高い例である。内越遺跡では、住居跡が1軒しか確認されていないが、品田氏が指摘するように報告書で「土坑」として扱われたSK25は住居跡の可能性が高い〔品田1993〕。同時併存する住居跡は1～2軒程であろう。また、この集落は2期で終了していることからすると、何らかの目的で構成された「主村」に対する「分村」であった可能性も考えられる。しかし検出された1号住居跡は1辺の長さが8mをこし、床面の面積は約65m²と大型の部類に属する。古墳時代の「豪族居館」以前では、ランク的には上位の住居跡である¹³⁾。内越遺跡がいづれかの集落に帰属する「分村」でも、単にキャンプ的要素のみで成立していたものでないとの現れとして注目される。

この他、短期継続型に属する遺跡は存在するものの、住居跡の確認例が少ないとことから、現状では明確にしえない部分があまりにも多い。ただ、立地的には内越遺跡例のように比較的見通しの良い高所に立地しているものと、西岩野遺跡や戸口遺跡などのように「低地」に立地するものがある。後者は農耕に係るものという推定も可能であるが¹⁴⁾、西谷遺跡例のように居住域の直下に生産の基盤を持つ集落が存在することから、慎重な評価が必要となろう。

〈短期継続型B〉

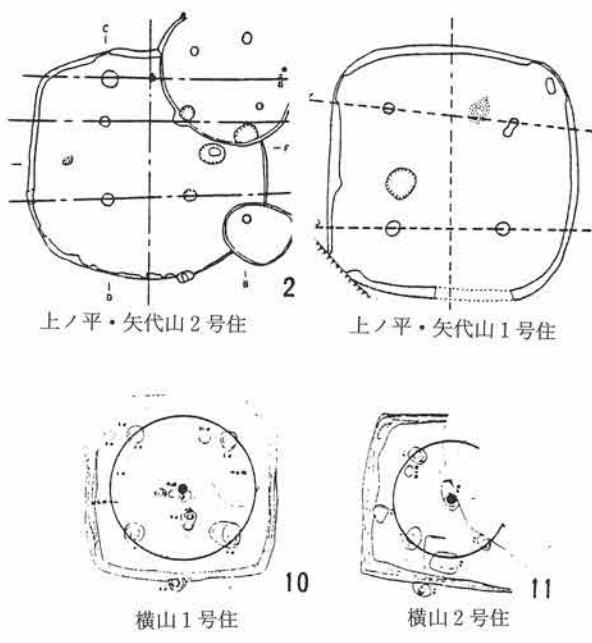
三条市孤崎遺跡、吉川町長峰遺跡、六日町金屋遺跡などランクAの遺跡がある。これまで問題にしてきた調査上の限界を考慮しても、これらの集落はさほど継続せず、短時間に終焉を迎えた遺跡と理解できよう。同時併存の住居跡は1～2軒であり、集落として捉える場合には限界も多い。いずれも比較的高所に営まれた遺跡であり、短期継続型Aとは立地上、変化が認められる。

4 遺跡構成要素の検討

(1) 竪穴住居跡の平面プランと構造

集落を捉えていく前提として、その消長のみならず、生活空間である竪穴住居跡の構造について検討を試みたい。竪穴住居跡の平面プランと柱穴の配置が、時期的な問題だけなく地域色をも考慮して検討すべきことは、先学の研究成果として提示できよう〔石野1975、橋本1976〕。

住居跡の平面プランと主柱穴の組み合わせについて、より具体的に整備したのが都出比呂志氏である。都出氏は石野氏の論を更に発展させ、以下のような分類を行った。まず平面プラン以前に、炉と主柱穴の配置を問題と



第20図 住居跡の構造 (品田1993aより)

している。すなわち「住居床面の中心点を基準とする円周上に柱穴が配列されるもの」を「支柱配列求心構造」（以下、求心構造）とする。これに対し、炉が住居跡の中心には配置されず、「一本の対称軸の両側に支柱を配し、住居の規模を大きくするには中心軸と同じ向きに主柱数を増加させるもの」を「主柱配列有軸対称構造」（以下、対称構造）と定義している。この構造の違いは、弥生時代中期にまでさかのぼり、一般的に西日本では「求心構造」が、東日本では「対称構造」が基本とされ、「竈」が導入されるまで存続するとしている〔都出1989a〕。

東日本と西日本における竪穴住居跡の構造の違いは、「炉」の形態にも現れている。西日本が「灰穴炉」であるのに対し、東日本は「地床炉」が一般的である。西日本＝求心構造・灰穴炉、東日本＝対称構造・地床炉という分布の境界は日本海側が富山県、太平洋側が愛知県あたりといいう〔都出1989a〕。

都出氏の指摘を越後の状況に照らし合わせた論功が、川村浩二・品田高志の両氏から提示されている。川村氏は中期の下谷地遺跡と後期後半（2期）の内越遺跡で検出された住居跡を例に、越後の状況を論じている〔川村1990a〕。下谷地遺跡の炉は「灰穴炉」で、「求心構造」を採用していることから、この段階では極めて西日本的な要素が強いとしている。これに対して2期の内越遺跡1号住居跡は、炉が住居床面の中心にあり、柱穴の配置も「求心構造」を採用している点は西日本的な要素である。しかし炉は「灰穴炉」ではなく「地床炉」である点が東日本的な要素で、この複合形態が越後の地域色の一つであるとしている。

川村氏の論を発展させて越後の様相を検討した品田高志氏は、中期以降の竪穴住居跡を対象とし、平面形態・主柱穴の配置を関連付けた変遷を問題とした〔品田1993a〕。品田氏によれば、中期前半には平面プランが長楕円形で対称構造を呈するが（古志郡域一長岡市尾立遺跡）、中期後半には円形に変わり（阿賀北地域一滝ノ前遺跡、柏崎平野一下谷地遺跡）、以降は東北南部系の天王山式土器分布圏は円形、北陸系土器分布圏では隅丸方形に変化すると指摘している。後期後半（2期）以降、隅丸部がわずかに角張るものへ、終末期（今回の検討では5期）には方形へと変化しているといいう。

一方、住居跡の構造は「求心構造」を基本とするが、一部で対称構造の住居跡が認められる（頸城平野の上ノ平・矢代山1・2号住居跡、古志郡域の横山2・4号住居跡）といいう。住居跡の平面プラン・構造について、大きな傾向は品田説から学ぶことがあまりにも多い。6期以降の住居跡構造について、品田氏は作図を行っているものの、明言は差し控えている〔品田1993b〕。ここでは5・6期～10期の住居跡についても若干の検討を行ってみたい。

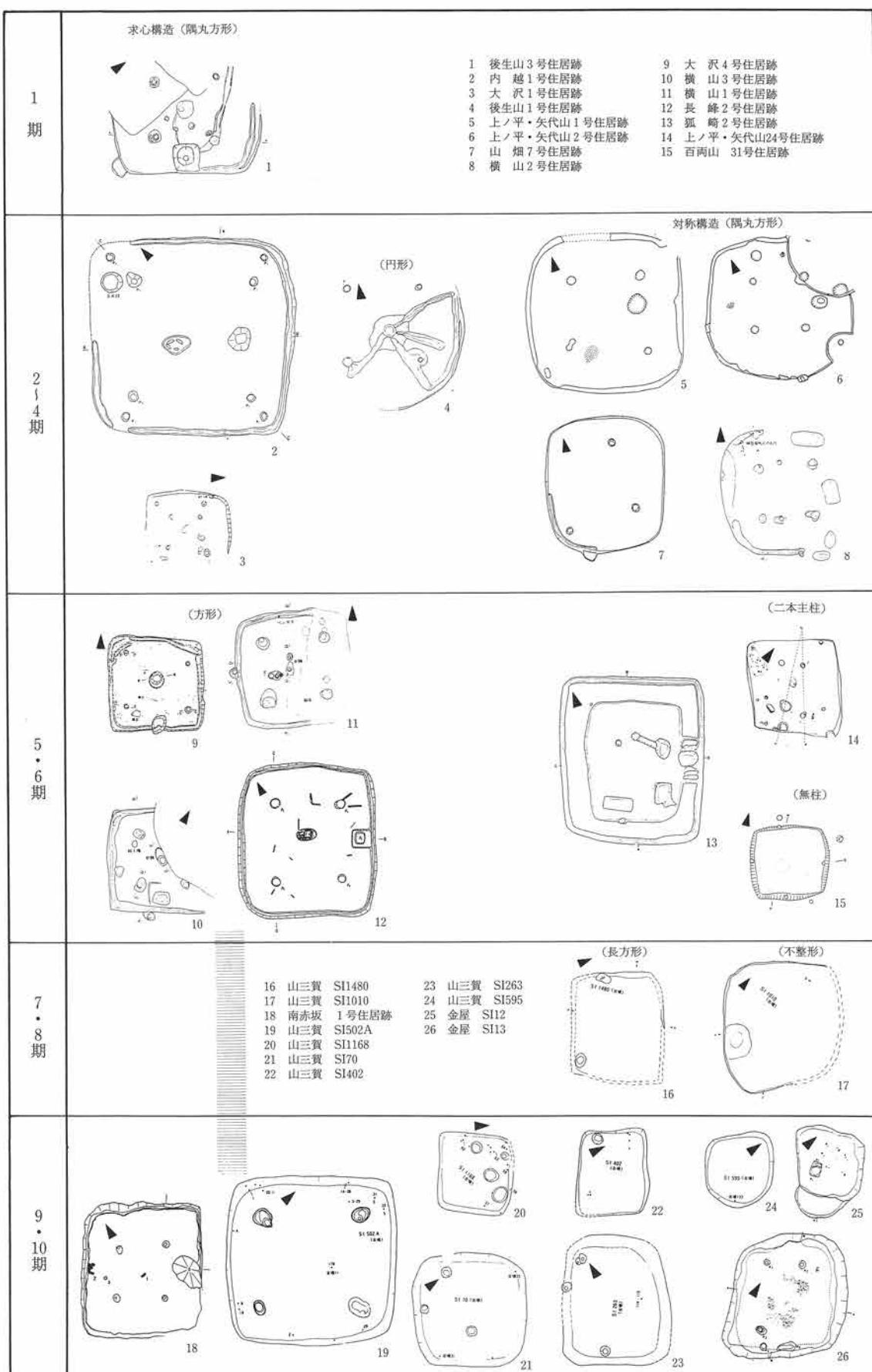
（2）竪穴住居跡の平面プランと構造の変遷

1) 5期以前

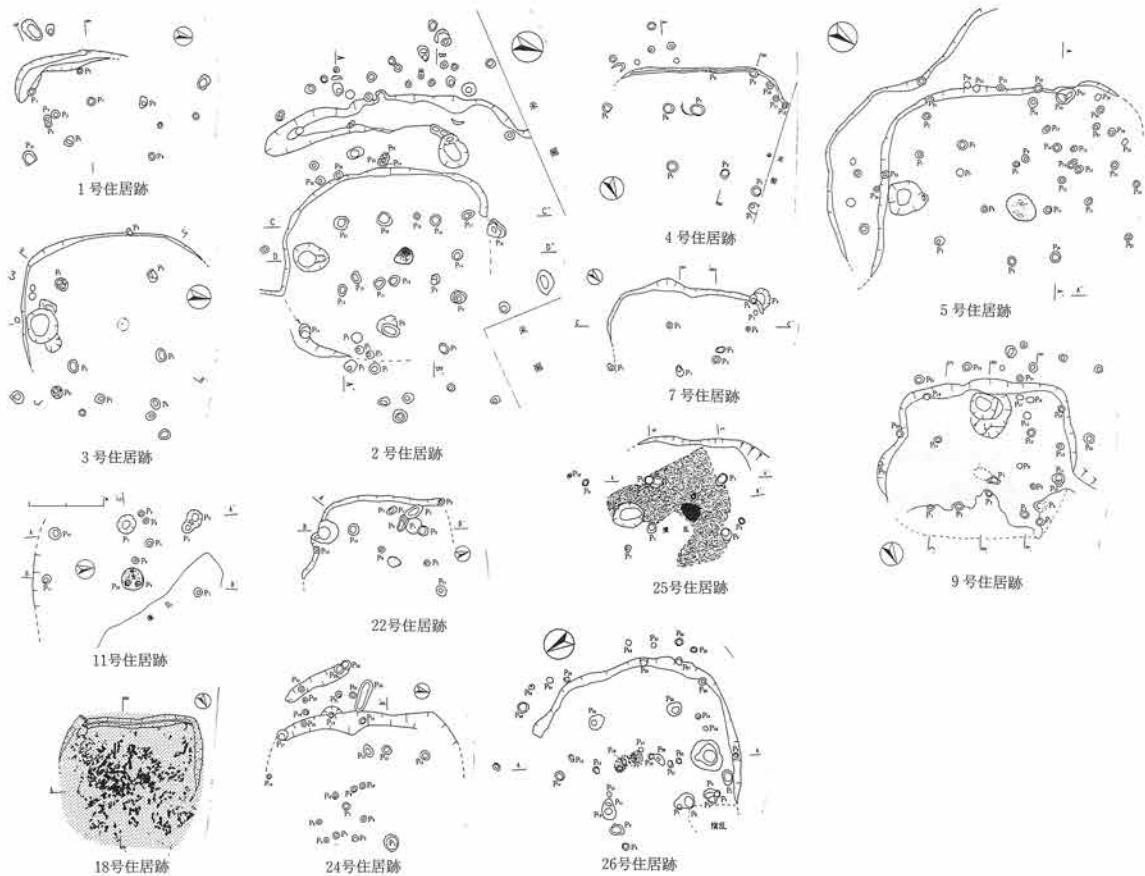
5・6期～10期までの状況を検討するにあたり、問題となるのが時期区分である。終末期以前の様相として品田氏が提示した住居跡のうち、巻町大沢遺跡4号住居跡・横山遺跡1・3号住居跡、上ノ平・矢代山24号住居跡は5期に下ると思われる。ここではこれらを5期として論を進めたい。5・6期の動向で、大きな問題となるのが「平面プランの方形化」と「求心構造への統一化」である。長期継続型Aの集落で、住居跡の変遷がおえる斐太遺跡群・横山遺跡・大沢遺跡を例にとって検討することにしたい。

〈1〉斐太遺跡群

検出された住居跡のうち時代と構造が把握しえるのは、2期の上ノ平・矢代山遺跡1・2号住居跡と、5期の上ノ平・矢代山遺跡24号住居跡である。1・2号住居跡は、品田氏が指摘するように炉が住居床面の中央には位置せず、柱穴が左右対称に配置された「対称構造」である。これに対し上ノ平・矢代山24号住居跡は、主柱穴が二本であり構造は判別しえないが、炉が床面の中央付近に位置することから、上ノ平・



第21図 越後における住居跡の変遷 (S = 1/250)



第22図 八幡山遺跡の住居跡 ($S = 1/100$) (市教委1994より)

矢代山1・2号住居跡とは様相が異なっている。このような5期における変革は、横山遺跡の場合に更に明瞭に現れている。

〈2〉 横山遺跡

検出された4軒の住居跡は、大きく5期（1号住居跡・3号住居跡）と、それよりも古い時期のもの（2号住居跡）、時期が不明なもの（4号住居跡）に分かれる。住居跡は半壊したものが大半で、明確でない部分も多いが、5期よりも古いと考える2号住居跡は隅丸方形を呈しており、主柱穴も左右対称の6本である。品田氏の指摘するように、対称構造の住居跡である。

これに対し、5期の1号・3号住居跡は平面プランが方形を呈する。炉は住居床面の中央に位置し、主柱穴が4本であることから「求心構造」の住居跡である。また3号住居跡には、住居の南東方向に二重ピットの「貯蔵穴」と考えられる土坑が存在する点からも、前段階とは異なる住居構造といえよう。

〈3〉 大沢遺跡

4軒の住居跡が確認されている。このうち柱穴・炉の配置が明確な1号・4号住居跡は、いずれも求心構造である。わずか2軒ではあるが、2期の1号住居跡は平面プランは隅丸方形であるのに対し、5期の4号住居跡は方形へと変化している。平面プランは変化しているものの、住居跡の構造は伝統的に「求心構造」を採用している。

越後では前記のとうり一遺跡で住居跡構造の変遷がおえる遺跡が少ない。わずか3遺跡での検討であり推測の域を出ないが、5期の大きな画期が存在する点は重視すべきである。前代から求心構造を採用していた集落はもとより、対称構造を採用していた集落でも求心構造へと変化している。阿賀北地域・魚沼地域の様相は不明確であるが、越後では求心構造を採用した地域（蒲原郡域・柏崎平野・姫川流域）と、対

第9表 壓穴住居跡における面積の変遷

| 床面積 | ~10 | ~15 | ~25 | ~25 | ~30 | ~35 | ~45 | ~45 | ~50 | ~55 | ~60 | ~65 | ~70以上 | |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|---|
| 資料数 | 4 | 6 | 2 | 4 | 3 | 2 | 2 | 1 | 1 | | 2 | 27 | | |
| 1期 | | | | | | | 1 | | 1 | | | 2 | | 2 |
| 2～4期 | 1 | 2 | 1 | | | 1 | | 2 | | | | 2 | 9 | |
| 5・6期 | | 2 | | 2 | | 1 | | 1 | | | | | 6 | |
| 7・8期 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | |
| 9・10期 | 3 | 2 | | 2 | 2 | | | | | | | | 9 | |

称構造を採用した地域（吉志郡域・頸城郡域の山間部）がありそうである。こうした地域間の構造の差異が解消されるのが5期である。

この時期、集落の周りに濠を巡らす防御的機能を持った環濠集落（全段階から継続する集落形態＝戦乱の消長）は依然として存在するが、前述のとおり住居跡平面プランが方形化を呈すること、住居跡構造が「求心構造」に変わるなど、新たな住居形態が導入されていることは重要であろう。当期・当域の集落の消長を考える上で大きなポイントとなることから、次章以降でこの意義について若干の検討を加えたい。

2) 5期以降

5期に入り、新たに集落を構成する遺跡での「求心構造」の採用は、他遺跡も同様である。吉川町長峰2号住居跡は「求心構造」で、住居床面の北東に「貯蔵穴」と考えられる「二重ピット」または「二重土坑」が配置されている。住居跡の平面プランの方形化も同様である。

しかし、全ての住居跡が求心構造・方形の平面プランを採用したのではない。6期の三条市狐崎2号住居跡は平面プランが方形であること、炉が住居床面の中央に位置していること、北東隅に「貯蔵穴」と考えられる二重ピットが存在する点は、横山遺跡例や長峰遺跡例と同様であるが、主柱穴が判然としない。また用途不明の方形土坑が2基、連結する円形ピットが存在する点は上記の遺跡とは異なる。越後全域で全てが統一されたわけではない。時期的変遷、住居跡・遺跡の性格にもよるが、異なる点以上に酷似する様相が認められるのは重要である。5・6期の「統一化」は大きな画期である。

第10表 地域別にみた住居跡構造の変遷

| | 1 | 2 | 3・4 | 5・6 | 7・8 | 9・10 | 備考 |
|---------|--------------|---------|-----|---------|---------------|------|----|
| 姫川流域 | 求心..... | | | | | | |
| | 円・隅丸 隅丸..... | | | | | | |
| 頸城平野 | | 対称..... | | 求心..... | | | |
| | | | | 方..... | | | |
| 柏崎平野 | | 求心..... | | | | | |
| | | 隅丸..... | | | | | |
| 魚沼郡域 | | | | | 不明..... | | |
| | | | | | 不定形..... | | |
| 信濃川中流域 | | 対称..... | | 求心..... | | | |
| | | 隅丸..... | | 方..... | | | |
| 蒲原郡域 | | 求心..... | | | | | |
| | | 隅丸..... | | 方..... | | | |
| 阿賀野川北地域 | ? | | | | 求心?不明..... | | |
| | 円..... | | | | 方・長方・不定形..... | | |

これに対して7・8期以降（特に8期以降）の住居跡構造は、まとまりに欠ける。検出された住居跡は蒲原郡域の南赤坂遺跡、阿賀北地域の山三賀II遺跡、魚沼地域の六日町金屋遺跡がある。このうち南赤坂遺跡を除くと、前段階の住居跡構造や土器様相が明確でない地域の住居跡だけに、その評価は慎重にならざるえないが、現状では住居跡構造の地域色が出始める時期と評価したい。

正式報告が行われていないが、大沢遺跡と同じく蒲原郡域にある南赤坂遺跡では3軒の住居跡が確認されており、このうち1軒は平面図が公開されている（第21図-18）。住居跡の平面プランは方形で、炉は住居跡床面の中央に位置し、主柱穴は4本の「求心構造」である。9期に比定されるこの住居跡は、5期の大沢遺跡と同様な傾向が認められる。

5期以前の様相が不明確な阿賀北地域の山三賀II遺跡、魚沼地域の金屋遺跡では異なった様相が認められる。このうち山三賀II遺跡は8期～12期と幅があるものの、12軒の住居跡が確認されており、住居跡の変遷がおえる良好な遺跡である。8期のSI1010・SI1480は、共に後世の住居跡に切られており住居跡構造は判然としないが、いずれも主柱穴が明確でなく、これまでのあり方とは異なっている。またSI1480は平面プランは長方形化しており、前段階とは異なった様相が認められる。9期のSI502Aも後世の住居跡と切り合うが、平面プランは方形で、炉は存在しないが「求心構造」と想定されている点などから、5期以来の伝統を残す住居跡構造を採用している点が注目される。10期以降の平面プランは、方形（SI1168）、長方形¹⁵⁾（SI263・402・650・1124）、楕円形（SI439・595）など形態は豊富である。炉が検出された住居跡がないこと、主柱穴が不明確で「求心構造」「対称構造」の推測はSI502A以外に不可能なことなど、様々な点で異なっている。前段階の状況が不明なことを考慮しても、住居跡の「不統一化」と評価できよう。

これは六日町金屋遺跡でも同様である。SI12・13の出土土器は北陸系という概念では説明できないものであり、正確な位置付けは困難であるが、小型丸底壺や器台が出土していることから、9期～11・12期と幅を持った時期と仮定して論を進めたい（第23図）。金屋遺跡の住居跡は崩れを想定しても、平面プラン方形とは考えがたい。また主柱穴が判然としないこと、焼土範囲の記載はあるものの、明確に炉と認定できるものが存在しないことからも、山三賀II遺跡と同様に「住居構造の不統一化」が想定しえる。

5 集落の画期について

前章までで検討してきた①集落の消長、②竪穴住居跡の構造を中心に、墳墓・土器などの要素を加味して越後における集落の画期について検討を試みたい。

各地域での遺跡の消長を見みると、5期に大きな画期が存在する。防御的集落の大多数がこの時期を持って消失するし、5期から新集落も増加している。一つの画期として提示できる。これ以外には、どの時期に画期があるのであろうか。5期を大画期として、その前後について考えてみたい。

（中期後半）

この時期から集落構成を開始して、1期以降まで継続する遺跡には、関川流域の斐太遺跡群、古志郡域の横山遺跡、奈良崎遺跡¹⁶⁾などが挙げられる。具体的な比率は不明なもの、防御的集落とされるものは、中期後半から集落の構成を開始する可能性が高い。中期の中葉（畿内第Ⅲ様式併行期）に畿内色の強い方形溝墓と共に、防御的集落の風潮（戦乱）が伝播した可能性も高いが、現状では中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）頃には画期が存在するようである。

（1期）

1期は第1表でも明らかなように、3小期の細分が可能なようである。このため本論で1期とした遺跡

でも、どの時点で集落の構成が開始されたのかが問題となる。八幡山遺跡の場合にはN-8号住居跡出土土器〔伊与部1989〕から、1期（中）には集落の構成が開始されていた可能性が高い。一方、姫川流域の後生山遺跡の場合にも1期（中）には集落構成が開始されていたようである。これらの集落の上限がどこまでさかのぼるかは不明であるが、防御的集落の構成開始は1期までに成立していたものが多いようである。

（2期）

一つの画期として提示できよう。各地域で短期継続型Aの集落数が飛躍的に増加している。また住居跡の平面プランが隅丸方形になるなど変化は大きい。しかし、こうした画期が越後の全域のものとは言い難い。北陸系土器分布圏に属する地域と、そうではない阿賀野北地域と魚沼地域とでは様相が異なるようである。2期には土器が信濃や会津に拡散しているが、越後全域を包括するほどの勢いはない。ここでは北陸系土器分布圏での画期を中心に記す。

新集落の出現以外に、中期後半や1期から継続する遺跡も、この時期に入って規模が拡大しているようである。当期における遺跡内の動向は、様々な面で現れている。墓制では、大平城遺跡における方形台状墓の登場が挙げられる。標高が高い台地の縁辺に位置するこの墓制の導入は、山陰地方との関連が指摘されている〔吉岡1991〕。一辺が20mを超し、越後最古の前方後円墳である稻場塚古墳（全長26m、7期か？）とは、時期や墳形が異なるものの、墓の造営に対する労力の点で大きな差異は見いたしがたい。2期における山陰系の大規模な墓制の出現や、多数の遺跡が出現している点は、一つの画期として捉えることができよう。

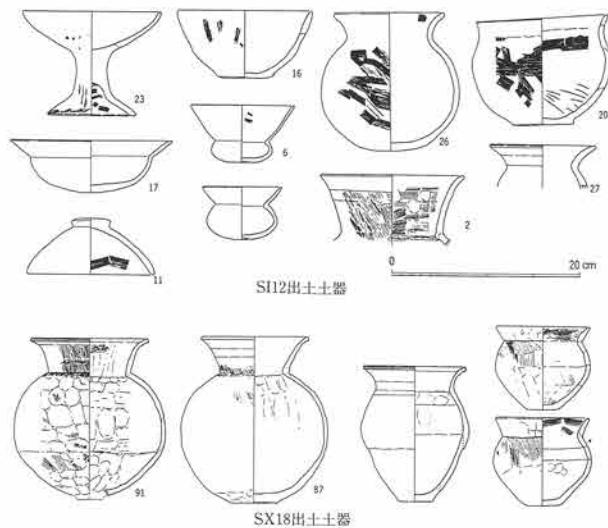
なお、土器では北陸南西部（加賀以西）との地域色が顕著になる。越後では1期の土器様相が十分に把握できないものの、地域色の顕在化や新集落の出現、新たな墓制の導入など、人の移住に加え、在地色がより濃くなるという矛盾した動向が見受けられる。

（3～4期）

確認された遺跡数が最も少ない時期である。2期に成立した短期継続型Aの集落は、ほとんど3期までは継続していないようである。また、防御的集落では後生山遺跡、野村・萱場遺跡、経塚山遺跡、大平城遺跡など3期まで継続しないものが存在する可能性が高い。越後の防御的集落は5期まで継続する場合が多いが、少数ながら3期に機能を失った防御的集落が存在することは重要である。防御的集落＝戦乱の痕跡とすれば、2期をもって廃絶する防御的集落は戦乱に破れた結果か、または（対象地域は明確でないが）ある地域との戦乱が終した結果である可能性が高い。また、遺跡数の激減は集落の集約化が原因であろうか。2期とは異なる点が多い。

（5～6期）

最も大きな画期となる。防御的集落の機能が失われ、新集落が誕生する時期である。また土器様相の変革や新墓制の導入、地域圏の拡大など社会そのものの変化として位置付けられる。



第23図 金屋遺跡出土土器（県教委1985より）

変革は住居跡にも現れており、平面プランは方形に統一化される。また全てではないが、求心構造を採用した住居跡が多い。前段階で対象構造を選択していた横山遺跡や斐太遺跡群でも求心構造に変化するなど、集落景観そのものが変化する時期と考える。

新集落の出現は、2期の飛躍的増加を更に上回る。これまで北陸系土器分布圏に属していなかった阿賀野北地域や魚沼地域でも、北陸北東部系土器群に急激に変化し、多くの新集落が出現している。北陸系土器群はこの時期に最も拡散しており、北は信濃・会津の隣国はもとより、関東南部にまで達している〔川村1994〕。このうち、北信濃・会津では北陸北東部系土器群が在地の土器様相はもとより、生活様式そのものを変革しているなど、北陸北東部に包括された可能性が指摘されている〔川村1993a〕。防御的集落の解体に伴う社会の変革は、戦乱の終結に伴う新体制の確立と評価でき、この点は次章で検討することにしたい。

(7～8期)

現状では、5期ほどの画期は見いだしがたい。5期以降に誕生した集落は、約50%は継続して営まれている。新たに集落構成が開始される遺跡に山三賀II遺跡があるにすぎない。また前段階まで各地に拡散していた北陸北東部系土器群は、当期で新たに拡散したものは少なく、地域圏の縮小の段階と評価できる。住居跡は、山三賀II遺跡以外で確認されていないことから明確でないが、平面プランの崩れや求心構造を採用していないなどの変革が認められる。なおこの変革は、地域的な特徴の可能性も多い。墓制では蒲原郡域を中心に、前方後円墳・前方後方墳の築造が開始される時期である。墓制の変革が顕著なことから集落の変革が際立つと時期とも考えられるが、住居跡構造以外には明確でない。5・6期に拡散した北陸北東部系の土器群は当期まで認められるが、数量的には激減しており、移動先での変革が認められる。

(9～10期)

5期以降に集落構成を開始した遺跡のうち、当期まで継続する遺跡は約20%と少ない。一方、当期に出現在する集落は阿賀北地域の古谷地B遺跡や魚沼郡域の金屋遺跡などが挙げられるが、概して少ない。確認された遺跡数が少ないと大きな特徴である。この時期に出現する集落のうち、金屋遺跡出土土器は北陸系土器群とは言い難い。越後の分割が進む時期と考える。

住居跡構造でも地域色が顕著に現れてくる。前方後円墳が築造されている蒲原郡域の南赤坂遺跡では、求心構造が採用され、住居跡一辺の中央部に貯蔵穴をもつなど、5期以来の伝統が守られている。一方、山三賀II遺跡ではこうした伝統が守られているとは言いたい。当遺跡で大型に属し、土器様相も他の遺構と異なるSI502Aは求心構造を採用しているが、貯蔵穴を欠く。それ以外の住居跡は柱穴・構造とも判然としない。これは金屋遺跡も同様であり、平面プランの崩れ、構造に不統一化の段階と評価できる。

土器では北陸北東部系の組成とは異なるものが出現在はじめる。田嶋明人氏(1993)・春日真実氏(1994)が指摘するように、山三賀II遺跡SI502A出土の高杯は関東北東部系のものに類似する。また、地域が異なることから山三賀II遺跡とは単純に比較はできないが、金屋遺跡の土器群は上野の組成に類似する。こうした傾向が認められる当期は、5期以来の様相が序々に取り扱われる開始期の段階として評価できる。

6 北陸他地域の動向

不確定な要素を多く含むが、越後における集落の検討を行ってきた。越後の状況は北陸内でどのように評価できるのであろうか。若狭・越後を除く加賀・能登・越中と対比してみたい。

(1) 集落の消長と画期について

〈越中〉 高橋浩二氏によれば、1期の動向は不明確なもの、2期に入り遺跡は増加するようである。2期に成立する遺跡の大半は3期まで継続するが、3期から4期の間で消失するとして、4期の画期を主張する〔高橋1993〕。これは、越後の状況と異なるように見える。しかし高橋氏が4期とした砺波地域の桜町遺跡〔小矢部市教委1987〕・平桜川東遺跡〔小矢部市教委1979〕、水見・高岡地域の下佐野遺跡〔高岡市教委1992〕、射水地域の串田新遺跡〔大門町教委1981〕・中山南遺跡〔富山県教委1971〕などは、5期に下る可能性が極めて高い。越中においても5期が大きな画期である可能性もある。

一方、防御的集落は4期に機能が消失するようである。婦負地域の白鳥城遺跡〔富山市教委1981〕、西金屋京平遺跡〔金子1982〕、新川地域の江上A遺跡〔富山県教委・滑川市教委1982〕、本江扇平遺跡〔滑川市史編さん委員会1979〕、天神山城遺跡〔麻柄1983〕の5遺跡が挙げられるが、現状では3期までしか営まれていない。また開始時期は、江上A遺跡の1期が最古であるが、それ以外の集落はランクB・Cのものが多く、詳細は不明である。高橋氏は高地性環濠集落（白鳥城遺跡、天神山遺跡）、高地性集落（西金屋京平遺跡、本江扇平遺跡）は3期にのみ機能して短期間に解体したと評価している。しかし、いずれもランクB・Cの遺跡であることから、その評価は慎重にすべきであろう。

5期以降の動向であるが、5期に成立した可能性の高い遺跡は7・8期までは継続しないようである。これは7・8期に成立した遺跡においても同様で、9期までは継続しない。9期における新たな集落の展開は砺波地域の竹倉島遺跡〔富山県教委1978〕以外には明確でない。

越中における遺跡の動向は、越後とは若干異なるようである。部分的な調査に終わっているため明確にしえないものも多いが、長期継続型の集落は現状では確認しえない。遺跡の消長における画期は、大きくは同様の傾向が認められるものの、防御的集落の動向は異っている。

〈能登〉 栃木英道氏により、集落は3種に分類が行われている。中期後半～後期前半（1期古段階）に集落の構成が開始され、1・2期まで継続するもの（A型集落）、1・2期から集落構成が開始されて5・6期まで継続するもの（B型集落）、5・6期から集落構成が開始され9・10期まで継続するもの（C型集落）があるという。また、これらの集落の画期は「B型集落が出現し狭議の高地性集落・大型土坑群¹⁷⁾が（再）出現する1期」と「A型集落と狭議の高地性集落が衰退しはじめる3期」、「大型土坑群が消滅しC型集落が出現する4期から5期」と3つの画期が存在しているという。

5・6期以降の状況は不明瞭である。7・8期から新たに出現する集落は明確でないようである。また9・10期から集落の再構成が認められるなど、ほぼ同様の傾向が認められる。

防御的集落は鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡〔石川県理文センター1988〕や北吉田ウルフ遺跡〔石川県理文センター1988〕などが確認されているが、1期に集落構成が開始されるが、3期までは継続しない。こうした傾向は越後と大きく異なる点であろう。

〈加賀〉 安英樹氏により集落の類型化が行われている〔安1993〕。集落の変遷は「弥生時代中期のⅢ様式後半からⅣ様式の時期に、以降弥生時代を継続する集落が成立、2期には集落の増加・拡大して各地のブロック内に群在」しているという。2期における遺跡の増加、集落の拡大は越後と同じ傾向が認められる。2期以降は「5・6期に以降古墳時代前期を継続する集落が成立して交代」し、「2期的な集落の群在を払拭・解消」し、「9・10期には整備された古墳時代集落が完成」するとしている。大きくは越後と同様な変遷をたどるようである。

防御的集落は、3～4期には終焉を迎えるようである。南加賀では河田山遺跡〔樋田1993〕、北加賀には

鉢状茶臼山遺跡〔宇ノ木町教委1987〕、低地ではあるが大型の溝が確認されてた西念・南新保遺跡〔金沢市教委1992ほか〕がある。現状では、北東部に位置する遺跡ほど終焉時期が下降するとの指摘がある〔田嶋1993〕。越後とは防衛的集落の確認数や、存続時期において大きな差異が認められる。

(2) 集落構成要素の比較

〈住居跡の平面プラン〉

円形・多角形プラン 円形プランは越後でも1期以前に認められる。東北南部系土器が出土した住居跡では2期以降も存在するが、現状では限定される。多角形プランの住居跡は、越後では未確認である。

円形プランの堅穴住居跡は、加賀では5期の刈安野ノ宮遺跡23号住居跡〔石川県理文センター1992〕、能登では2～3期の宿東山2号住居跡〔石川県理文センター1987〕、越中では5期の中山南遺跡3号住居跡が下限のようである。これらの住居跡は、いずれも床面積が80m²を超す特大の住居跡である。集落内の中心的な住居跡であることから、意図的に円形の平面プランを選択していた可能性が高い。

これは多角形プランを有する住居跡も同様である。能登では未確認であるが、越中では小久米A遺跡〔氷見市教委1985〕、本江遺跡〔滑川市史編さん委員会1979〕などで、加賀では1期の八田小鯱II1号住居跡〔浜崎1993a〕から5期の刈安野ノ宮23号住居跡で確認されている。これらは五角形プランと六角形プランに分かれるが、円形プランの住居跡と同じく床面面積が大きく、5期を最後に消失してしまう。

隅丸方形から方形への変化は5期を境にして、北陸他地域でも認められるようである。ただし、能登以外で円形・多角形プランを呈する住居跡がある点は越後と大きく異なっている。

〈柱穴配置と炉の構造〉

都出氏の説く「求心構造」・「対称構造」の違いである。越後の状況は前述の通り、5期を境に「求心構造」へと変化するが、同一遺跡内でも5期より古い段階では「対称構造」は存在している。

越中・能登・加賀では「対称構造」はごく僅かで、「求心構造」を呈するものが圧倒的に多い。炉が住居跡床面の中心に位置せず、柱穴は床面中央を軸にして配置されたものが能登の国分高井山遺跡1号住居跡〔円形プラン〕〔七尾市教委ほか1984〕・宿向山遺跡13号住居跡〔方形プラン〕〔石川県理文センター1987〕、加賀の塚崎遺跡9号住居跡〔隅丸方形プラン〕〔石川県理文センター1976〕・鉢状茶臼山遺跡7号住居跡〔隅丸方形プラン〕などで確認されている。しかし、いずれも「対称構造」とは言いがたい。「対称構造」の確実な例は能登の宿東山17号住居跡が挙げられるにすぎない。越後の海岸沿いの遺跡では未確認であるが、山間部の遺跡で確認できる「対称構造」の住居跡が、北陸他地域でごくわずかで有る点は重要であろう。越後の地域色である可能性が極めて高い。

一方、炉は旧国単位で大きく異なるようである。加賀では4期まで「地床炉」と「灰穴炉」の両者が存在するが、やや「灰穴炉」が多い。しかし、5期に入ると「地床炉」が圧倒的に多くなるという。5期における「灰穴炉」の減少は、能登・越中でも認められる。しかし、5期以前の動向は加賀と能登・越中では大きく異なっている。「灰穴炉」自体、能登・越中ではごくわずかで、全体の10%にも満たず、加賀ほど盛行はしないようである。5期に一応の画期は存在するものの、「地床炉」が主体を占めている。越後の状況は前述のとおり「地床炉」のみであり、現状では1期以降に「灰床炉」は存在しない。住居の平面プラン・炉の構造と共に北陸内では、東日本的な要素が豊富に認められる

(2) 防衛的集落の動向

丘陵・台地上に立地して環濠を巡らすもの他に、平地に位置するが、環濠に類似する「大溝」が検出された遺跡も防衛的集落に含めた。防衛的集落は4加賀で遺跡（河田山遺跡、鉢状茶臼山遺跡、大海西山

遺跡、西念・南新保遺跡)、能登で2遺跡(杉谷チャノバタケ遺跡、北吉田フルウ遺跡)、越中では5遺跡(白鳥城遺跡、天神山城遺跡、西金屋京平遺跡、本江扇平遺跡、江上A遺跡)が報告されているにすぎない。また、その機能が停止する時期は、加賀が2期、能登が3期で、越中が4期とされている。環濠・防御的集落の性格を考慮すれば、その機能が停止した時期が、「戦乱」の終結を意味することは容易に可能である。越後における環濠集落の存続は、「戦乱」の状況が北陸内で最も長く続いたことを意味する。

7 古墳出現前後の越後の動向

第4章で検討した「集落の画期」、第5章の「北陸他地域の動向」から、越後の古墳出現前後の動向について検討を試みたい。検討にあたり、大きな画期である5期以前と以後に分けて考える。

(1) 5期以前

5期以前の動向で最も問題となるのが防御的集落の消長である。越後では約30の防御的集落が確認されているが、どういった要因で成立したのであろうか。これについて1993年度の日本考古学協会新潟大会『東日本における古墳出現過程の再検討』で、甘粕健氏と田嶋明人氏から見解が提示されている。いずれも北陸・東日本を視野に入れたもので、越後に限定した見解ではない。

甘粕氏は北陸の防御的集落の成立要因について、北陸勢力対畿内の抗争を想定し、抗争に一応の終止符が打たれたことで、防御的集落の機能が停止するとした。これはおよそ2~3期である。2~3期から汎北陸的土器様式は崩れ、北陸南西部と北東部の地域差が顕著になるという。これは「越連合が解体し、少なくとも東西二つの部族連合に分かれて邪馬台国に統属することになった」ことを意味するとした。また越後で遅くまで環濠集落が存続するのは「北陸勢力にとって、西方からの脅威の解消とは一応無関係に東北勢力との間に緊張関係が続いたからであろう」と結論づけている。甘粕氏の説を要約すれば、加賀・能登環濠集落が終結を迎える2~3期以前の越後は、畿内勢力に対しての防御的集落である。しかし、それ以降は北陸北東部に組み込まれ、東北勢力との緊張を北陸北東部地域の最北東部に位置して前線基地的な役割を果たしていたことになる。

一方の田嶋明人氏は、戦乱の要因に「複数の外圧」を想定し、「外圧を直接的な契機とした北陸内部間での戦闘、北陸内部での越連合形成のための抗争」とした。すなわち「東の越」と「西の越」では連携した外部勢力が異なり、背後の勢力の代理抗争的な戦いを想定しているようである。連携した外部勢力は2期以降の土器に表れる影響から、東の越(北陸北東部)が丹後、西の越(北陸南西部)が山陰となろう。田嶋氏の見解に基づけば、越後は北陸北東部に属し、北陸の南西部と抗争を行っていたことになる。

越後の防御的集落は、2期をもって終了するものと、5期まで存続するものに分かれる。前者は、甘粕説では畿内との抗争が終結した結果であり、田嶋説では北陸内の抗争の終結に伴い消失したことになる。2期で消失する防御的集落がどのような要因によるのか、北陸内の動向については筆者の力量では決っしがたく今後の課題である。ここでは越後の動向についてのみ考えてみたい。

A. 防御的集落の第一次消失期

越中の状況とは異なるようであるが、越後でも加賀・能登と連動するかの様に3期には消失する防御的集落が存在することは重要であろう。3期には機能を失う防御的集落は、後生山遺跡・萱場遺跡・大平城遺跡・山谷下層遺跡など数量的には限定される。これらの遺跡は越後の各地域に分かれるが、後生山遺跡は姫川流域で唯一の防御的集落である。玉作り集団の集落と想定されるこの遺跡は、正式報告が行われていないが、1期(中)から集落構成が開始して2期まで継続している。

現状で姫川流域では、後生山遺跡以外に防御的集落は存在しない。防御的集落が未確認の魚沼郡域もあるが、越後では例外的な地域である。姫川流域は伝統的に笛吹田遺跡・三又遺跡・田伏遺跡など、6世紀前半まで玉作り遺跡が集中するが、古墳の存在は確認されていないという特殊性もある。国内唯一の硬玉の産地という地理的条件も含め、越後では特異な地域として認識すべきであろう。硬玉という特殊品をめぐり早くから掌握され、畿内勢力に組み込まれた結果であろうか。仮にこの想定が成り立つのであれば、後生山遺跡が消失する3期以降のこととなろう。

その他の地域の防御的集落のうち、方形台状墓が確認された大平城遺跡も注目される。方形台状墓は、山陰地方の影響で成立したとの指摘があり〔吉岡1992〕、これを造営した集落が継続せず、3期に消失することは重要である。2期以降、北陸南西部以西（特に山陰地方）の情報が少くなり、3期には遮断される。これは2期以降の土器組成にも顕著で〔田嶋1993ほか〕、甕形土器の形態〔谷内尾1983、坂井1983、滝沢1993b〕、文様の施文法〔滝沢1993a〕に表われており興味深い。仮に田嶋氏が説くように、北陸南西部と北東部（越後はこの範疇に含まれる）の戦乱が起こったしたら、それは短期間のものとなろうか。土器の時期区分、組成を含めた地域色を明確にする必要があるが、現状では1期における北陸南西部と北東部の様相差は、2期ほど顕著でないようである。北陸南西部と北東部に戦乱が起ったとしても、加賀で防御的集落が消失する3期には終結していたことになる。1期に両地域の様相差が顕著でないことは、それほどの緊張状態があったとは考えがたい。両地域の戦乱は、土器の様相差が顕著になってから加賀で防御的集落が機能している時期となり、現状では2期に限定される。戦乱の対象が時期毎に異なったとしても、1期又は、それよりも古い段階の防御的集落の意義が明確にしえない。1期・2期の時期区分と川村氏が行ったような組成レベルの地域差を、旧国・旧郡レベルで行う必要があろう〔川村1993b〕。

3・4期には、姫川流域を除いて緊張の度合いが高まったようである。2期に出現した小集落が姿を消すにも関わらず、防御的集落が5期まで継続しているのは、集村化が進んだことを意味し、緊張状態が強まった結果と考える。

B. 防御的集落の第二次消失時期

5期の変革は前述のとおり大きなものである。①防御的集落の解体、②新集落の出現、③住居跡平面プランの方形化、④住居跡構造の変革（求心構造へ）、⑤土器では「小型化」と「外来系の増大」などがある。前時代的なものの腐食した大きな変換である。

防御的集落は前述のとおり北陸他地域でも認められるが、越後では最も遅くまで認められ、廃絶時期は5期である。視点を北陸から離し、東日本全体に目を向けると越後の様相が更に明瞭になる。日本海側における環濠集落の北限は、現状では越後である。太平洋側の状況は明瞭ではないが、内陸部の上野では5・6期まで環濠集落が存続している。〔橋本1993〕。上野の状況が問題であるが、越後は全国でも最後まで環濠集落が継続した地域の一つといえる。甘粕氏が説く様に、対東北勢力との緊張状態なのであろうか。

この問題の手がかりの一つになるのが土器がある。東北南部系の天王山式土器が、越後での在地系土器（北陸系土器）と共に伴するのは、今回の時期区分の1・2期までとなろう〔田中1992〕。3～4期の動向が不明確ではあるが、3期以降に天王山式土器の出土例がほとんど存在しない¹⁸⁾。東北南部系の土器群は、5・6期の横山遺跡や狐崎遺跡で少量は確認されているが、主体となるのは1～2期である。1～2期における越後の天王山式土器の存在は、越後と東北南部の交流を予想させるものである。これに対して3期以降は、越後の土器様相も未解明であるが、東北南部系の土器群がほとんど確認されていない。

能登と加賀で防御的集落の機能が停止した時期は、対象は不明であるが戦乱の終結を意味するものだと

すれば、甘粕説は有利となろう。すなわち北陸南西部、北東部で戦乱が終結したにもかかわらず、越後ではなおも防御的集落が残存している。また前段階まで多数の遺跡で確認された東北南部系の土器が、全くといっていいほど確認されなくなる点も重要である。

越後は1～2期において戦乱の対象は明らかにしえないが、緊張状態が継続していた。この時期は、東北系の土器群が多く入っていることから、東北以北の勢力とは友好関係にあった考える。しかしその後、東北系の土器が途絶えるのは、東北勢力と友好関係に亀裂が生じ、甘粕氏が説くように、戦乱の対称になった結果と考える。こうした状況で、北陸北東部の越後は東北勢力との戦乱又は、防御を行う任務をおっていったとも考えられる。これは横山遺跡（斐太遺跡群は判然としないが）では、環濠という外からの情報は遮った状況で、「住居跡平面プランの方形化」や「求心構造への変化」という北陸南西部以西の情報は伝達されているが、東北の情報（土器や石器などの遺物の他に、遺構のあり方など）が十分に入ってこないことからも推測が可能である。5期まで防御的集落が残存する大きな理由は、東北以北の勢力との緊張関係というのもひとつの要因であったことと考える。

(2) 5期以降

〈5～8期〉 防御的集落の機能が消失すると前後して新たな集落が多く築かれる。北陸北東部系土器群の分布範囲以外の地域であった阿賀北地域や魚沼郡域が包括される。こうした現象は越後ののみではなく、北信濃・会津や出羽を含め、地域圏が拡大している。最も北陸系の土器群が盛行する時期であり、越後もその枠内に取り入れられた現象と評価できる。こうした動きは生活用具である土器以外にも住居跡の構造が変化しており、生活様式そのものの変換を意味する。

越後以外に拡散する北陸系土器群について、会津地方のものは能登との関連が指摘されている〔坂井・川村1993〕。出羽は異なったルートを想定せざるえないが、信濃・会津については河川を主要ルートとして考えるのが自然であろう。会津へは阿賀野川が、信濃へは信濃川から越後を抜けるルートがある。阿賀野川は信濃川と河口付近で合流して日本海に流れ込んでいたが、仮に能登からの移住者が信濃川ルートを経て、信濃・会津に赴いたならば、信濃川河口付近の緒立遺跡・的場遺跡が重要な拠点となっていたと考えられる。両遺跡は5期から集落構成を開始して、およそ8期までは継続している。的場遺跡では、その後の時期の遺物も散見しえるが、主体となるのは8期までであろう。

北陸系土器群の拡散は5・6期が主体で、7期には減少し、8期にはほとんど認められない。こうした動きと緒立遺跡・的場遺跡の消長がほぼ連動するのは、能登からの移住者を送り出すのに何らかの貢献をし、その役目を終えると急速に規模が縮小するとの想定も可能であろう。

〈9・10期〉 北陸北東部系土器群の拡散が終了すると、越後内では地域色が明確になり北関東の影響が表れてくる。集落の消長においても、確実に画期が存在する。上記の緒立遺跡・的場遺跡の消失や、5・6期に成立した集落の多くは、当期まで継続しない。的場・緒立両遺跡が8期で衰退しているにも関わらず、同じ蒲原郡域の南赤坂遺跡では、依然として5期以降の伝統的な住居構造を兼ね備えている。これは弥彦・角田山麓に位置し、前方後円墳や前方後方墳が隣接することが大きく影響している。越後で確認された9期以降の堅穴住居跡は限定されるが、平面プランが方形を呈し、求心構造を採用した住居跡が確認されているのは南赤坂遺跡のみである。山三賀II遺跡では、炉が未検出であるが、規模が最も大きく、赤彩された小型精製土器が多量に確認されたSI502のみが平面プラン方形・求心構造の可能性があるにすぎない。この他の住居跡は、平面プランや住居構造の変革が甚だしい。小地域間で異なった住居跡構造や、土器の様相差が出てくるのが9期以降の特徴と考える。

金屋遺跡の土器様相からも9・10期以降は、5・6期的なものの多くが駆逐された段階と評価できる。地域は大きく分かれ、律令期における越後の範囲とは掛け離れたものとなっている。前期の有力古墳が集中する地域では、この時期を持って古墳の造営が行われていないことも重要である。中期的な様相への変革が進められるのが当期の特徴と思われる。

(3) 古墳時代中期・後期への展開

越後の生産力を端的に表すものに、古墳の規模がある。越後の古墳は規模が小さいことのみならず、前期古墳で群をなすものが少ないようでもある。前期では蒲原郡域に有力古墳が多く見られるが、これはあくまでも大局的な分布の現れで、首長墓と想定される稻葉塚古墳、山谷古墳、菖蒲塚古墳は同一の首長墓系譜といえる程、密接した分布は示していないようにも思われる。また、県内随一の規模を誇る八幡山古墳も群を形成していない。前期古墳で群を構成するのは、古志郡域の三条市保内三王山古墳群のみであろう。こうした点も越後の生産力に持続性がなく、不安定な勢力編成であることの現れのように考える。

前期古墳が集中する蒲原郡域・古志郡域の古墳が衰退すると入れ替わり、中期には魚沼郡域に有力古墳が集中する。地域の有力古墳が5世紀前半・5世紀後半・6世紀前半と計3度にわたり勢力が移動すると考えた都出比呂志氏は、こうした動きが畿内の有力古墳の動きと連動するとしている〔都出1988〕。都出氏の見解に従えば、畿内における地方の支配力は古墳時代の開始当初から強大であろう。

細かな年代を整理する必要があるが、越後では古墳時代前期には蒲原・古志郡域、中期には魚沼郡域、後期には頸城郡域に古墳の分布が集中する。これは都出氏の説くように、畿内と連動しているかのように見える。しかし中期に古墳の分布が魚沼郡域に移動する状況が、全て畿内主導の動きに対応した結果なのであろうか。上記の移動理由については、日本海ルート⇒内陸ルートへの変換に伴う動きという見解がある〔春日1994〕。有力古墳の移動・集落の動向などを考えると、この説に賛同せざるえないが、畿内の方的なルート変更という動きに対応した結果という、地方の受動的な立場によるものであろうか。中期における上野の勢力は巨大で、太田市天神山古墳は全長210mと東日本では最大の規模を誇る〔群馬県教委1970〕。この古墳が成立する要因として、在地の自立発展も考慮する必要があろう。巨大古墳を造営する基盤があってのルート変更に伴い、越後の魚沼郡域に中期古墳が集中するという地方の能動的な動きと評価すれば、都出氏の見解にはにわかに賛同しがたい。

しかし古墳時代における

第11表 越後における古墳の変遷（甘粕1992より）

越後自体の動向には、それほど主体性は感じられない。生産力を考えれば、最も安定していたのは頸城郡域である。律令期に国府・国分寺が設置された最も有力な推定地である。古代には13の郷を有するなど、越後では最も栄えた地域である。この地域に何故に前期～中期の有力古墳が築造されなかつたのであろうか。

| | 魚野川流域 | 高田平野 | 柏崎平野 | 新潟平野 | |
|-----|-----------|----------|-----------|--------|--------------------|
| | | | | 信濃川左岸 | 信濃川右岸 |
| 1期 | | | | 稻場塚●26 | |
| 2期 | | | | 山谷■37 | 三王山4号■16 |
| 3期 | | | 吉井行塚1号●32 | 菖蒲塚●54 | 古津八幡山○55 三王山11号○22 |
| 4期 | | 丸山□20 | | | 三王山1号●38 |
| 5期 | | | | | |
| 6期 | | | | | |
| 7期 | 飯綱山10号○40 | | | | |
| 8期 | | | | | |
| 9期 | | | | | |
| 10期 | | 菅原31号●29 | | | |

●前方後円墳 ■前方後方墳 ○円墳 □方墳

頸城郡域に古墳が集中するのは古墳時代後期に入ってからである。全国的にも大規模な防御的集落である斐太遺跡群を支える生産力があったのにも関わらず、現状ではこの勢力にあった古墳は築造されていない。こうした点から、前期の蒲原・古志郡域における古墳の発展は、阿賀野川・信濃川流域から内陸（信濃・会津）に人員を排出するルートが重視されたため、中期の魚沼郡域の発展は上野の勢力拡大に伴うルート変更、後期に入って初めて生産性にあった古墳の造営が認められる。

8 ま と め

越後における古墳出現前後の集落を考える上で、前提となる事項について検討を行ってきた。調査例が少ないとから抽出できなかった点も多いが、以下の特徴が看取できる。

- ① 越後における遺跡の動向は5期に大きな画期がある。その他の時期では2期と9期に画期は認められる。これらの画期は北陸内の画期とほぼ連動したものである。
- ② 2期における新集落の増大は越後独自の特徴ではないが、土器・墓制から人の移住に伴う増大である可能性が高い。しかし、人の移住が想定しえる集落は比較的短期間で消失している。
- ③ 越後では約30か所の防御的集落があり、これは北陸内では最も数が多い。防御的集落の開始時期は、中期後半頃と推定されるものが多いが、なお明確にしえない。その機能が消失する時期は大きく2期と5期に別れる。消失時期の違いは、それぞれ戦乱の対象が異なった可能性が高い。2期は明確にしえない部分が多いが、5期での消失は東北南部との緊張状態が解消されたことが要因と考える。

越後は全国でも、最も遅くまで防御的集落が継続した地域の一つである。これは上記の通り、北陸の最北部として、東北南部系の勢力との緊張状態があったことの表れと考える。

- ④ 住居跡の平面プランは5期を境にして大きく変化する。この変革は全国的な動向と軌を一にする。しかし、炉の構造は1期以降大きな変革は認められない。炉はいずれも「地床炉」であるが、この有り方は加賀・能登・越中とは異なり、東日本的な要素が強く残存している。
- ⑤ 5期以降、新集落が爆発的に出現する。これまで北陸北東部系土器分布圏外であった阿賀野北地域、魚沼郡域はもとより、出羽西部、信濃北部、岩背西部（会津）を包括した地域に拡大する。しかし、7期以降は変化し、9・10期には魚沼郡域が脱落する。
- ⑥ 9・10期には北関東的な要素が序々に浸透してくる。11期以降の状況は検討しえなかつたが、有力古墳の衰退と、それに伴う新集落の出現・北関東的な要素の増幅は「日本海ルート」の衰退と、「東山道的なルート」への変革と考える。この下地の上で、魚沼郡域を中心に中期の古墳が突如として増大する。

越後における弥生時代後期～古墳時代前半の集落を論じる前段階として、基礎的整理に心がけてきたが検討しえなかつた問題も多い。今回提示した時期区分にしても、土器編年の整備に伴い、より限定した画期が抽出しえると思われる。特に、1期、3・4期の認識は資料不足もあり、今後の課題の一つである。

本稿を作成するにあたり春日真実、川村浩二、木島勉、坂井秀弥、佐藤雅一、品田高志、田村浩司、鶴巻康志、藤巻正信、本間桂吉、吉井雅勇、渡辺朋和、安秀樹の各氏からご教示、文献の配慮をいただいた。文末ではあるが、記して感謝いたします。

註

- 1) 甘粕健氏によれば、稻場塚古墳は奈良県箸墓古墳の1/10の企画で築造されているという〔甘粕1993b〕。
- 2) 集落といった場合には水田・畑地なども含まれるが、ここでは集落遺跡（住居跡を伴う生活空間）を中心とする。また、

墓についてのみ、若干触れることにしたい。

- 3) 新潟シンポ編年は、1993年度日本考古学協会新潟大会で設定された時間軸である。今回の時期区分はこれを基本に1期を細分した(表1)。石川県では2期の細分も行われているが[柄木1994]。越後での細分は困難である。不確定要素を含むが遺跡の年代は○期と、一方、遺跡の存続年代は○期間と表記する(1~3期まで継続する遺跡は3期間)。
- 4) これまで北陸地方の弥生時代後期~古墳時代前半の土器編年は、漆町編年における画期の設定が引用されてきた。特に漆町4群(月影II式)と漆町5群(白江式古)については、「外来系土器の有無」が重視されていた。しかし北加賀以北の地域では、外来系土器の定着が遅れるとされており、画期の設定に微妙なズレが生じている。今回検討する時期区分では、シンポ編年の4期と5期の線引きは「土器の小型化」を重視したい。
- 5) 吉井遺跡群とは、柏崎平野の東部に位置する柏崎市大字吉井・曾地・矢田地内の遺跡群である。野付・萱場遺跡、行塚遺跡、戸口遺跡が今回の検討対象に入る遺跡である。
- 6) 内越遺跡で検出された土坑のうち、SK24は隅丸方形プラン呈する堅穴住居跡の一端部の可能性が指摘されている。また品田氏は明言していないが、壁ぎわの周溝と考えられる施設がSK25でも検出されており、SK24と同じく住居跡の可能性が考えられる。
- 7) 坂井秀弥氏が指摘するように、中世以前の越後は農業生産に不向きであった。頸城平野以外は山間部の高低差がなく、また砂丘の存在により水がうまく海に抜けない地域であった。このことは、農業生産に必要な灌水や排水をうまく行なえなかつことにつながる。実際の農業生産は丘陵の縁辺や、丘陵直下の比較的集落に近接した場所で水田が営まれていたと可能性が指摘されている[坂井1993]。西谷遺跡例はこうした坂井氏の指摘に適合した立地と考えている。
- 8) 未報告資料であるが、佐藤雅一氏の御好意により、実見して御教示をいただく機会を得た。
- 9) 太平城遺跡出土土器については、再実測・追加実測を試みた(第10図)。これにより新たな知見も確認できている。紙面の都合上、概略のみ記す。出土地点であるが、大きくB区、C区、D区に分かれている。このうちB・C区は丘陵の頂部、D区はB・C区の一段低いテラスに位置している。出土土器は地点別に掲載した。
- B区の出土遺物の分布は第11図に記した。各遺構に伴う遺構の抽出は困難であるが、3号は方形台状墓の覆土に伴う可能性が高い。10・14・15・21など、多くは環濠と推定される3号溝の内部からの出土である。小破片が多いものの近江系器台(8)、赤彩された甕(2)の形状から2期の範疇で考えたい。
- 一方、C区出土土器は2号方形台状墓の覆土から出土したもの(23・29など)、環濠内(32)、2号方形台状墓と環濠内側間の包含層から検出されたもの(22・29など)がある。このうち環濠出土の32は口縁部が長く、やや時期が新しくなる可能性が高い。しかし、その他の土器群はB区出土土器と同様に、2期の範疇で考えたい。
- 調査の性格上、全体の組成を明言することはできないが以下の点が指摘できよう。一つは、甕の比率が極めて低いことである。これに対して、壺・高杯・器台の比率が高い。また、文様・赤彩の比率が高い。文様は凹線文系のが目立つ。凹線文系としたものでも幾つかに分類が可能なことは以前、指摘したが[滝沢1993c]、太平城遺跡出土土器は擬凹線文A類が多い。時期的な問題を考慮する必要があるが、越後では特異な様相を呈している。
- 10) 未報告資料であるが、三条市教育委員会田村浩司氏の御好意により、実見して御教示をいただく機会を得た。
- 11) 広井造氏によれば、八幡山遺跡の前方後方形周溝墓は赤塚次郎氏の分類[赤塚1992]のB2型とし、前方部の一隅が途切れるタイプハ千葉県北ノ作1号墳と共通するという。このことから6期前後に位置付けられている[広井1993b]。
- 12) 遺跡の類型化にあたり、長期継続型・短期継続型という大別を行ったが、遺構・遺物量の増減は、分類に加味していない。例えば1~5期まで継続したランクAの遺跡では、遺構(住居跡)数が増大する時期や、ランクA'の遺跡では、遺物量が増大する時期・激減する時期を分類の対象とはしていない。分類上には現れないものの、重要な要素と考えることから、こうした傾向が把握できる遺跡については、文中で触れることにしたい。
- 13) 越後における1期~10期までの堅穴住居跡の規模を表示した品田氏によれば、内越遺跡1号住居跡は最も規模が大きい[品田1993]。2期の下馬場1号住居跡が、確認調査の結果で一辺が約9mであり、内越1号住居跡と同様に大型住居跡の可能性が高いが、現状では大型住居跡(床面積65m²以上)は2期より新しい時期では確認されていない。
- 14) 戸口遺跡では、幅約2.5mの水路と推定される「溝」が検出されている。
- 15) 住居跡平面プランの正方形・長方形の識別は、プランの短軸÷長軸が0.85以下になるものを長方形、それよりも数値が高いものを正方形とした。
- 16) 正式報告は行われていないが奈良崎遺跡が位置する直下に、大武遺跡がある。この遺跡では弥生時代中期の土器が出土している。奈良崎遺跡周辺では弥生中期から集落が営まれた可能性が高い。
- 17) 貯蔵機能を持つ「倉」は北陸南西部と北東部では異なるといわれている。北陸南西部は布掘建物(両側柱列の各掘方を溝状の掘り込みでつなぐ)、北東部は大型方形土坑[三浦1988]と言われている[田嶋1993]。越後では斐太遺跡群百両山10号土坑が貯蔵機能を持つ大型方形土坑と認識されているのみである。出土土器が明確でないことから限定しえないが、八幡山遺跡の報告書中でSK1号土坑も大型方形土坑の可能性もある。

18) 3~4期の遺跡はごく僅かであることから、天王山式土器群が未確認ということも念頭におく必要がある。

引用・参考文献

- 甘粕 健 1986「古墳文化の形成」『新潟県史』通史編1 pp. 281~307 新潟県
- 甘粕 健 1992「越後」「前方後円墳集成」1 東北・関東編 pp. 54~60 山川出版社
- 甘粕 健 1993a「古墳文化形成過程の新潟平野と会津盆地」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』 pp. 119~125 研究者グループ
- 甘粕 健 1993b「みのりくを目指して 日本海ルートにおける東日本の古墳出現期にいたる政治過程の予察」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp. 1~6 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 阿部朝衛 1989「新潟県阿賀野川以北の古墳時代前期」「北越考古学」第2号 pp. 25~36 北越考古学会
- 新井市教育委員会 1985「1 上百々遺跡」『昭和59年度新井市遺跡調査報告書』
- 石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査事業団 1976「北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」II
- 石川県立埋蔵文化財センター 1987「宿向山遺跡」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1987「宿東山遺跡」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988「北吉田フルウ遺跡」「拓影」第28号
- 石川県立埋蔵文化財センター 1989「杉谷チャノバタケ遺跡」「石川県埋蔵文化財センターニュース」第9号
- 石川県立埋蔵文化財センター 1992「津幡町刈安野々宮遺跡」
- 石川県七尾市教育委員会・国分高井山遺跡発掘調査委員会 1984「国分高井山遺跡」
- 石川県宇ノ木町教育委員会 1987「宇ノ木町鉢伏茶臼山遺跡」
- 石川県金沢市教育委員会 1992「金沢市西念・南新保遺跡III」
- 石野博信 1975「考古学から見た古代日本の住居」「日本古代文化の探求一家一」(大林太良編) pp. 77~192 社会思想社
- 糸魚川市教育委員会 1972「田伏玉造遺跡」
- 糸魚川市教育委員会 1983「遺跡範囲確認調査報告書(小畠遺跡 苦竹原V移籍 笛吹田遺跡)」
- 糸魚川市教育委員会 1984「笛吹田遺跡範囲確認調査報告書」
- 糸魚川市教育委員会 1986「後生山遺跡」(糸魚川市埋蔵文化財報告第13)
- 糸魚川市教育委員会 1987「昭和61年度遺跡範囲確認調査報告書(苦竹原C遺跡 山崎三十三塚 正面遺跡 後生山遺跡)」
(糸魚川市埋蔵文化財報告書第14)
- 稻葉塚古墳測量調査団 1993「新潟県弥彦村稻葉塚古墳測量調査報告」「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」pp. 79~108 研究者グループ
- 伊与部倫夫 1989「新潟県八幡山遺跡(日本海側における最北の高地性集落)」「探訪弥生の以北一畿内・東日本編一」pp. 304~311 有斐閣
- 青海町教育委員会 1979「大角地遺跡—飾玉とヒスイの工房跡—」
- 大潟町教育委員会 1988「丸山遺跡発掘調査報告書」
- 大沢遺跡調査団編 1981「大沢遺跡—B'・B地区の調査概報—」 卷町・潟東村教育委員会
- 小野 昭編 1982「大沢遺跡II—第3次調査概報—」 新潟大学考古学研究室
- 柏崎市教育委員会 1985a「吉井遺跡群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4)
- 柏崎市教育委員会 1985b「刈羽大平・小丸山」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5)
- 柏崎市教育委員会 1987「西岩野」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第7)
- 柏崎市教育委員会 1989「吉井行塚古墳群」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第10)
- 柏崎市教育委員会 1990「吉井遺跡群II」(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13)
- 樺田 誠 1993「河田山遺跡」「東日本における古墳出現過程の再検討」 pp. 121 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 春日真実 1994「古墳時代前期の土器」「北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV(一之口遺跡東地区)」 pp. 203~219 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男ほか 1977「伊乎乃都の古墳」「南魚沼」新潟県文化財調査年報第15 pp. 413~454 新潟県教育委員会
- 金子拓男 1991「古墳時代の遺構について」「山崎A遺跡発掘調査報告書」見附市埋蔵文化財調査報告書第8 pp. 96~99 見附市教育委員会
- 金子玲子 1982「西金屋京平遺跡」「富山市考古資料館報」No.7 富山市考古資料館
- 上市町教育委員会 1981「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編一」
- 刈羽村教育委員会 1992「西谷遺跡」(刈羽村埋蔵文化財調査報告書第1集)

- 川村浩二 1989「緒立八幡神社古墳の編年的位置」『新潟県考古学談話会』第4号 pp.30~39 新潟県考古学談話会
- 川村浩二 1990a「越後の弥生時代中・後期の竪穴式住居に関する覚書」『かみくひむし』第80号 pp.12~13 かみくひむしの会
- 川村浩二 1990b「倭国大乱と越後」『新潟史学会例会会報』第12号 pp.1~2 新潟史学会例会運営委員会
- 川村浩二 1993a「古墳出現前後における北陸北東部の土器組成」『環日本海地域比較史研究』2 pp.15~36 環日本海地域史比較研究会
- 川村浩二 1993b「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.7~16 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩二 1993c「山谷遺跡出土弥生土器の占める位置」『越後山谷古墳』 pp.116~121 新潟県卷町教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 川村浩二 1994「関東南部における北陸系土器の様相について」『庄内式土器研究VI』 pp.113~142 庄内式土器研究会
- 木島 勉 1987「新潟県後生山遺跡」『日本考古学年報(1985年度版)』38 pp.430~434 日本考古学協会
- 木島 勉 1989「三ツ又遺跡」『新潟県埋蔵文化財だより』No.5 pp.5 新潟県教育庁文化行政課
- 黒崎町教育委員会 1983『緒立遺跡発掘調査報告書』
- 黒崎町教育委員会 1993『緒立C遺跡発掘調査概報』
- 群馬県教育委員会 1970『史跡天神山古墳外掘部発掘調査報告書』
- 駒井和愛・吉田章一郎 1962『斐太一新潟県新井市の弥生聚落址一』 慶友社
- 近藤義郎 1983「前方後円墳の成立」『前方後円墳の時代』 pp.175~210 青木書店
- 坂井秀弥・横山勝栄・山本 肇 1983「考察一内越遺跡出土土器の越後における編年位置」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第33 国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書(内越遺跡)』
- 坂井秀弥 1985「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17 pp.9~27 新潟県史編纂委員会
- 坂井秀弥 1989a「古墳時代の土器と遺跡」『山三賀遺跡II』 pp.184~191 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989b「新潟県新津市八幡山古墳出土の古式土師器」『新潟県考古学談話会』第4号 pp.66~68 新潟県考古学談話会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993「古墳出現前後における越後の土器様相—越後・会津・能登」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』 pp.1~14 研究者グループ
- 坂井秀弥 1993「古代越後の環境・生産力・特性」『新潟県考古学談話会』第12号 pp.14~19 新潟県考古学談話会
- 上越市教育委員会 1979「II 山畑遺跡」『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』
- 上越市教育委員会 1991「中島廻り遺跡発掘調査報告書』
- 上越市教育委員会 1993「IV 子安遺跡」『市内遺跡確認範囲調査概要報告書』
- 品田高志 1990a「吉井遺跡群における遺跡の動態」『吉井遺跡群II』 pp.172~177 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1990b「越後の後期弥生土器とその様相—柏崎平野における北陸系土器群と人の移動—」『新潟県考古学談話会』第6号 pp.22~29
- 品田高志 1993a「越後の弥生集落—集落調査の現状と住居形態を中心にして—」『柏崎市立博物館館報』No.7 pp.93~135 柏崎市立博物館
- 品田高志 1993b「越後・佐渡における住居の変遷」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.19~20 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 鈴木俊成 1994「古墳時代前期の遺構」『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV(一之口遺跡東地区)』 pp.243~246 新潟県教育委員会・財団新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 菅沼 亘 1993「高地性集落としての山谷弥生時代遺跡」『越後山谷古墳』 pp.122~126 新潟県卷町教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 聖籠町教育委員会 1993『二本松東山遺跡』
- 高橋浩二 1993「越中の集落の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.30~32 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 高本 実・吉田 淳・宮本哲郎・楠 正勝 1983「北陸の弥生・古墳時代の竪穴住居址—弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居址を中心として—」『北陸の考古学』 pp.333~363 石川県考古学研究会
- 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年考収」『漆町遺跡』I pp.101~186 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1991「北陸の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』I pp.190~199 埋蔵文化財研究会
- 田嶋明人 1993「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.81~90 日本考古学協会新潟大会実行委員会

- 滝沢規朗 1992「西谷遺跡の水田跡について」『西谷遺跡発掘調査報告書』(刈羽村埋蔵文化財調査報告書第1集) pp. 86~89
刈羽村教育委員会
- 滝沢規朗 1993a「越後出土の祭祀遺物II」中部・北陸編 pp. 469~488 第1回東日本埋蔵文化財研究会資料 東日本埋蔵文化財研究会
- 滝沢規朗 1993b「越後における古墳出現前後の土器様相—甕の類別構成比と内面調整を中心に—」『新潟県考古学談話会』第11号 pp. 1~17 新潟県考古学談話会
- 滝沢規朗 1993c「越後における弥生後期以降の土器文様—凹線文系と刺突文を中心に—」『北越考古学』第6号 pp. 1~15 北越考古学研究会
- 滝沢規朗 1994「新井市斐太遺跡群の出土土器について」『新潟考古』第5号 pp. 75~104 新潟県考古学会
- 田中 靖 1988「北陸における天王山式系土器について」『新潟考古学談話会会報』第2号 pp. 5~8 新潟考古学談話会
- 田中 靖 1989a「北陸地方の天王山式土器」「天王山式期」をめぐって』の検討会資料 記録集 弥生時代研究会
- 田中 靖 1989b「島崎川流域における弥生時代の遺跡」『新潟県考古学談話会会報』第4号 pp. 11~15 新潟考古学談話会
- 田中 靖 1993「越後・佐渡の集落の概要」「東日本における古墳出現過程の再検討」 pp. 17~18 日本考古学S協会新潟大会実行委員会
- 都出比呂志 1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』第29巻4号 pp. 14~31
- 都出比呂志 1988「古代首長墓系諸の継続と断絶」『待兼山論叢』22 pp. 1~16
- 都出比呂志 1989a「2 堅穴式住居の平面形」「日本農耕社会の成立過程」 pp. 114~141 岩波書店
- 都出比呂志 1989b「地域圈と交易圏」「日本農耕社会の成立過程」 pp. 265~399 岩波書店
- 寺村光晴 1956「越後六地山遺跡」「上代文化」第30輯 國學院大学考古学会
- 寺村光晴・本間信昭・久我 勇・駒見和夫 1988「諫訪田遺跡の調査」「寺泊町史研究」第4号 pp. 15~30 寺泊町史編さん委員会
- 栃木英道 1993「能登の集落の概要」「東日本における古墳出現過程の再検討」pp. 33~42 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 富山県教育委員会 1971『小杉町中山南調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター・上市町教育委員会 1984『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編』
- 富山市教育委員会 1981『白鳥城跡試掘調査概要』 昭和55年度富山市埋蔵文化財調査報告2
- 富山県小矢部市教育委員会 1978『富山県小矢部市竹倉島遺跡発掘調査概要』
- 富山県小矢部市教育委員会 1979『富山県小矢部市平桜川東遺跡発掘調査概要』
- 富山県小矢部市教育委員会 1987『富山県小矢部市桜町遺跡』 小矢部市埋蔵文化財調査報告書台20冊
- 富山県高岡市教育委員会 1992『市内遺跡調査概報』I 高岡市埋蔵文化財調査概報第18冊
- 富山県大門町教育委員会 1981『串田新遺跡』II 大門町埋蔵文化財調査報告書第2冊
- 富山県滑川市史編さん委員会・滑川市 1979「本江遺跡」「滑川市史 考古資料編」
- 富山県滑川市史編さん委員会・滑川市 1979「本得扇平遺跡」「滑川市史 考古資料編」
- 富山県氷見市教育委員会 1985『富山県氷見市小久米A遺跡発掘調査報告書』
- 豊浦町教育委員会 1981『曾根遺跡I』 豊浦町文化財報告3
- 豊浦町教育委員会 1982『曾根遺跡II』 豊浦町文化財報告4
- 中郷村教育委員会 1987『籠峰遺跡発掘調査概報』
- 長岡市 1992『長岡市史資料編—原始・古代—』
- 新潟県教育委員会 1974『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(内町遺跡・大平城遺跡)』(埋蔵文化財緊急調査報告書第3)
- 新潟県教育委員会 1976『北陸北線埋蔵文化財発掘調査報告書(焼屋敷・杉穴森遺跡)』(埋蔵文化財緊急調査報告書第8・9)
- 新潟県教育委員会 1979『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(下谷地遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第19)
- 新潟県教育委員会 1983『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書(内越遺跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第33)
- 新潟県西山町教育委員会 1983『高塙B遺跡発掘調査報告書』
- 新潟県教育委員会 1984『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』
- 新潟県教育委員会 1985『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡』
- 新潟県教育委員会 1986『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西地区』
- 新潟県教育委員会 1989『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀II遺跡』
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV(一之口遺跡東地区)』

- 新潟市教育委員会 1986『六地山遺跡—1982年発掘調査を中心にして』(新潟市文化財調査報告書)
- 新潟市史編さん原始古代中世部会 1994「六地山遺跡」『新潟市史』資料編1 原始古代中世 pp.54~83
- 新潟県卷町教育委員会・新潟大学考古学研究室 1993『越後山谷古墳』
- 橋本 正 1976「堅穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23巻第3号 pp.37~72 考古学研究会
- 橋本博文 1993「関東北部における古墳出現期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.329~340 日本古学協会新潟大会実行委員会
- 長谷川二三夫・本間桂吉 1989「三条市ニツ山遺跡と表採遺物について」『新潟考古学談話会』第3号 pp.43~44 新潟考古学談話会
- 浜崎悟司 1993a「加賀における集落構成要素」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.105~110 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 浜崎悟司 1993b「加賀の集落構造の遷移」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.111~112 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 見附市教育委員会 1991『山崎A遺跡発掘調査報告書』 見附市埋蔵文化財調査報告第8
- 広井 造 1993a「横山遺跡」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.26 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 広井 造 1993b「越後ににおける弥生時代後期の墳墓」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.47~50 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 藤巻正信 1993「和島村奈良崎遺跡の第二期調査一方形溝墓を中心として」『新潟県考古学会第5回大会研究発表要旨』 pp.13~17 新潟県考古学会
- 前山精明 1994「卷町南赤坂遺跡」『新潟県考古学会第6回大会 研究発表会発表要旨』 pp.19~23 新潟県考古学会
- 麻柄一志 1983「北陸の高地性集落とその評価」『富山市考古資料館紀要』第2号 pp.24~40 富山市考古資料館
- 三浦純夫 1988「大型土坑の機能について」『竹生野遺跡』 pp.193~216 石川県埋蔵文化財センター
- 村上市教育委員会 1972『滝ノ前遺跡—新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急概要—』
- 見附市教育委員会 1988『耳取遺跡等範囲確認調査報告書』(見附市埋蔵文化財調査報告書第7)
- 安 英樹 1993「加賀における集落の消長」『東日本における古墳出現過程の再検討』 pp.91~104 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 吉岡康暢 1967「弥生—古墳転換期の土器祭司」『日本海域の土器・陶磁』[古代編] pp.392~463 六興出版
- 吉川町教育委員会 1984『長峰遺跡II』(新潟県中頸城郡吉川町長峰遺跡第3次発掘調査報告)』